

明治国際医療大学
業績報告書(年報)
【抜 粋】

令和5年度

巻 頭 言

学長 勝見 泰和

令和 5 年度明治国際医療大学業績報告書（年報）の巻頭言を執筆するにあたって、今までの巻頭言を今一度、精読してみました。それぞれの巻頭言では、歴代の学長の本学に対する熱い思いが感じられ、また半面、大学運営上の難しさやご苦勞も伝わってきました。あらためて謝意を申し上げます。

VUCA 時代での大学の使命は Society 5.0 に向けた人材育成にあり、年報はこの使命を果たす一つ的手段と考えます。今迄の年報を振り返りますと、平成 25 年度版では各教員の研究業績をユニット（講座）別から各教員別に掲載され、各教員の研究・教育・社会活動での「質の保証」が重要視されるようになりました。平成 30 年度版からは「教育の質的転換」という新しい視点から、学修者本位の教育実践へ展開されるようになりました。令和 4 年度版から明治国際医療大学業績報告書（年報）という名称に変更され、今回の令和 5 年度版では、各委員会の活動状況、FD・SD 委員会の活動内容などが加えられました。このように各教職員の 1 年間の自己点検・評価のみならず、本学全体の自己点検・評価の達成度が判断できるように深化してきたのです。

大学基準協会による第 4 期認証評価では、学修成果の公表、研究面の独立した評価、学生からの意見収集、オンライン教育の効果検討などの新しい評価基準が大学評価ハンドブック（2024 年 4 月版）に記されています。本学は令和 9 年度に日本高等教育評価機構による自己点検・評価（第 4 期認証評価）を受審する予定です。この認証受審での適合を得るには、令和 6 年度より毎年、大学および教職員の自己点検・評価をしっかりとしておく必要があります。

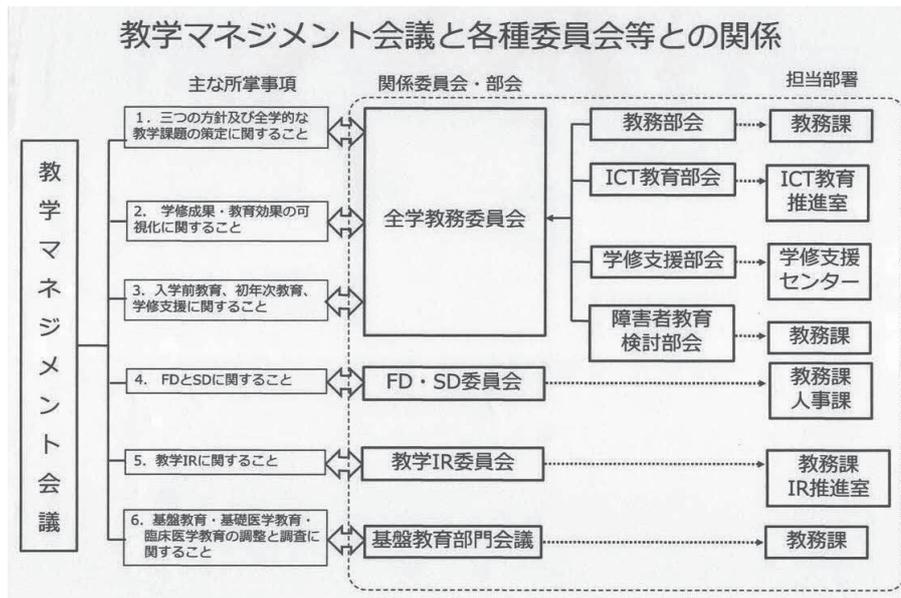
少子化の影響は徐々に入学者の減少に表されており、地方の中小大学は淘汰の時代だと言われています。明治国際医療大学年報は、1 年間の大学および各教職員の活動報告の集大成であり、自己点検・評価による大学改革でもあります。短期・中期・長期の目標設定を修正しながら、一歩ずつ前進したいと思っています。

教育活動の実績

基盤教育センター長 岡田 成 賛

本学は全学的な「内部質保証」のために教学運営の重要事項を検討し、教学改革を迅速に遂行する目的で、教学マネジメント会議を令和3年度より設けている。

教学マネジメント会議の組織図と各種委員会等との関係と目的については、以下の組織図の通りである。



その中で実務的な組織として全学教務委員会を各学科からの複数の担当者と教学IRや教学事務担当者の参加を得て設立し、学科間や全学的な教務事項の連絡・調整や全学的な教学課題の調整・立案を行い、教学マネジメントに当たっている。

令和5年度は、全委員会が同一テーマ『多様な学生に即した「学修者目線」による教育を実践し、教育目標を達成する手段・工夫』を協議し、試行・実践をしてきた。つまり教員が「何を教えたか」ではなく学生が「何を学び、身に付けることが出来たか」という教育方針の実践に向けて、学長を中心として教学マネジメントを展開し始めた年度である。

以下、昨年度から現在における教育活動の実施状況について記載する。

- 1) 成績評価の新基準－「秀」の導入；GPAの変化と進級判定基準の見直し、今後の展開
令和5年度（2023年度）新入生から成績評価にかかる Letter Grade を変更し、新たに「秀」を導入した新基準に移行した。

本学では学生の学修意欲の向上及び学修指導に役立てる目的で学修の状況及び成果を示す指標として「GPA」を導入している。この「GPA」の正確な算出と信頼度の向上、そ

して何よりも学修の理解度を正確に把握するために、今回「秀」を導入した。また同時に「GPA」の信頼度を上げるためには、レポート課題や実習評価についてもルーブリック等を用いて数値化することを徹底する必要がある、大学全体で推進している。

表 1

	秀	優	良	可	可-
2023以降	4	3	2	1	
2022以前		4	3	2	1

上記の表 1 に示すように、2022 年度までは、は 100 点～80 点までを「優」とし G P 配点は「4」を付与していたが、2023 年度新基準では 100 点～90 点を「秀」とし G P 配点は「4」、89 点～80 点を「優」とし G P 配点は「3」、「可」の G 配点 P は「2」から「1」となり、「可-」は削除した。

事前のシミュレーションは、「優」を獲得した者の 20%が「秀」に移行すると仮定して、全体的に 0.75 ポイント低下する事を想定し、G P A で判定している進級判定基準に大きく影響を及ぼすことを踏まえて、各学科の進級判定基準における G P A の数値を新たに設定した。

表 2

Mean ± s.d.	看護	救急	柔整	鍼灸
2023以降	2.20 ± 0.59	2.36 ± 0.56	2.48 ± 0.52	2.47 ± 0.68
2022以前	3.10 ± 0.52	3.18 ± 0.50	3.08 ± 0.57	3.04 ± 0.65

対象は 2023 年生のうち、1 年生修了時に学籍異動が無かった 225 名である。被殻として 2020 年から 2022 年生の 1 年修了時で学籍異動しなかった 696 名について解析を実施した。

上記の表 2 に示すように、2023 年生と 2022 年生以前の G P A を比較すると、0.6～0.9 の減少が確認された。これは事前のシミュレーションの 0.75 ポイント低下の想定が正しく、各学科の進級判定基準における新たな G P A の数値設定が、妥当である事を肯定している。

表 3

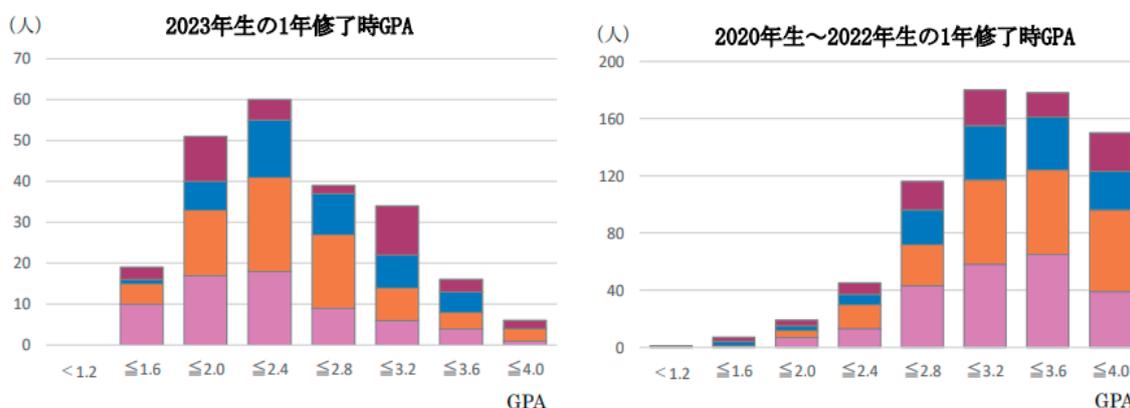


表 3 は 2023 年生と 2020～2022 年生の G P A 階級別のヒストグラムを示している。2023 年生の G P A 階級分布は、2022 年生以前のそれと大きく異なっている。2023 年生では、

GPA2.4以下の階級が最も多く、成績優秀層の階層が明確に分別されている。しかし成績全体では、左方に偏っており成績下位層が多く、階層の分別が不明確である。一方、2022年生以前ではGPA3.2以下の階層が最多で、上位3階層が多数を占め、成績上位層の分別が十分でない。しかし成績下位層の階層化は明瞭であった。

今後、新基準でのGPA評価に対して、経年的に各学年の科目に対するGPAの比較とその変化について分析を進め、各科目担当者と協議を進めて、成績上位層と下位層の分別を明瞭化できるのか評価方法の改良と工夫が必要なのであろう。

また、本学では就職時の成績表にGPAの数値を記載しているが、雇用先にも新旧の成績評価基準の差異について、丁寧な説明が必要である。

2) 入学前教育と初年次教育

本学は、入学前教育と初年次教育は一連のものと考え、両方に力を注いでいる。特に初年次教育は大学4年間の学びを決定づける重要な学年と認識し、全学的に取り組んできた。

入学前教育は入学手続きを完了した学生が、入学前に高等学校等から大学への円滑な移行を図り、大学での学びの効果を高めるため、また入学式以降の大学教育と大学生活に適應できるようにするために必要最低限の大学情報や教育科目の紹介、またそれに向けての心構えに関して教育指導を行うもので非常に重要である。各学科の特色に応じて特徴的な教育内容や教育計画（回数や時期、課題内容、形式として対面で行うのか遠隔にするのかなど）を入学生に分かるように創意工夫して実施している。2年前からICT推進課と学習支援センターの協力を得て、Google formを用いて課題を提供し、Mellyで連絡を取っている。学習支援センターからは、一般的な数学の問題と解剖学・生理学の入門編として課題を毎月更新して提供し、それに加えて各学科から興味を持たせるような専門科目に則した課題を提出して、毎月配信している。これらの課題の提出状況を記録し、提出物、経過等から学生の状況を把握し、入学時の学習指導の方向性の判断資料とし、学科でデータを分析し、早期に支援する体制を構築した。

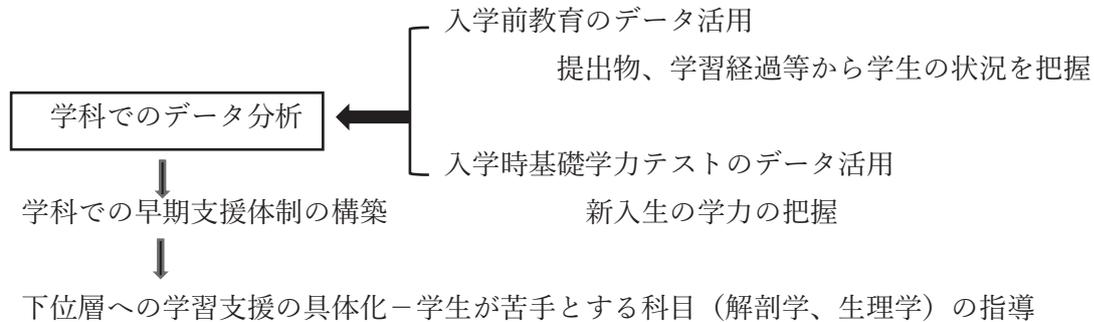
上述したように入学前教育の延長に初年次教育があり、連続するものであることから、初年次教育は、その観点に立って実施している。初年次教育については、これまでの分析から、大学4年間の高等教育において「初年次の学業成績と2年次以降の学業成績は、強い相関性がある」ということが明らかになっている。したがって、いかに初年次に高校生から大学生（生徒から学生に）に上手くスイッチ出来るかが、大学4年間の学びに大きく影響を及ぼすことから、学生には「学びの質の転換」として「自律的な学修」態度が身に付くよう初年次教育に取り組んでいる。

具体的には、入学時のオリエンテーションで実施される基礎学力テストのデータと、入学前教育のデータを活用して、新入生の学力の把握と分析を早期に行い、各学科において要指導学生のリスト作成し、成績下位層への学修支援を4時限終了後の16時30分から17時30分までの1時間（プラスワン）を学習指導として活用し、個々の学生に対応するように指導計画書を作成した。

要指導学生のなかにスポーツスカラ生が含まれている場合は、クラブ活動をしながら学

べる環境を提供する目的で、スポーツ振興部と協議し、クラブ活動と学習支援との調整を行う場を設けた。なお、要指導学生の指導にはクラスアドバイザーが重要な役割を果たすことが期待されるので、クラスアドバイザーの活動に関する認識やサポートを全学的に検討する必要がある。以下に「初年次教育」の流れを図で示す。

◎ 1年次成績下位層の早期把握と各学科の特色ある学習支援



以上の分析データを踏まえて4月中にクラスアドバイザーによる学生面談を1回以上実施する（初回の面談で再度面談による指導が必要とする学生には、ゴールデンウィーク前に面談を実施する）。面談によって学習支援に止まらず、入学生の友人関係、生活支援、生活指導等の把握を行い、学生自身に学生や教員を大切な個人として受け入れ、尊重し、協働し、共に学ぶ「大学」として認識してもらう。またスポーツスカラー生の下位学力者に対しては、早期にスポーツ振興部担当者、クラブ担当者とクラスアドバイザー合同面談を実施して、学科とスポーツ振興部担当者、クラブ担当者との情報共有を推進する。

3) DX教育の推進

本学においては学長主導の下「DX教育推進プロジェクトチーム」が設立され、多くの先生方や学生達からの意見を聴取し、本学に見合ったDX教育とは何かを立案し、それに向けての準備を進めている。DX教育のメリットは、学びの自由度と質を大きく向上させることである。具体的には、授業をオンライン化する事で、教員や学生は移動が不要となり、その分の時間を有効に活用できる。また動画での授業(オンデマンド)やアーカイブを利用すると好きな時間・場所で自由に何度でも受講することが出来る。

大学のDX教育化の課題としては、① 学生各人が個人でデバイスを持ち歩き、学修環境を整えることは、学生の経済的負担が発生すること、② 教職員、学生の双方が有効に利用するには、ICTに関する知識とGoogle classroom, Active portalなどを十分に使いこなすスキルを身に付けておく必要があること、③ 学内及び居住する場所のWi-Fi環境が整っていること、などの課題があるが、まずはDX教育を推進する目的と推進計画を作成し、大学全体で取り組む必要がある。

令和5年度ではDX教育推進の為に、まずはGoogle classroomを有効活用する方法について全学的に取り組んだ。これは令和5年5月にコロナ感染症が5類に引き下げられ、コロナ禍においては遠隔授業、オンデマンド授業等でGoogle classroomの活用が大学全体で

72%であったのが、コロナ感染症の5類移行後は50%を下回っている。DX教育の基盤となるGoogle classroomの活用が、DX教育推進するのに必須のシステムです。昨年度はGoogle classroomの活用についてアンケートを取り、またFD研修会においても全教員にGoogle classroomの活用について周知して、以下のようなClassroomの推奨運用例を作成し、Classroomの有用性を理解してもらい実施する事とした。

Classroomの推奨運用例

1. 本学におけるClassroomの活用方法は以下を推奨する。

- ① (該当科目の場合) オンライン授業の実施【リアルタイム型・オンデマンド型】
 - ・授業資料、授業ビデオ、テストなど必要な教材はClassroomにアップロードする。

※以下、対面授業も想定して推奨する。
- ② 授業資料の共有とレポート提出の窓口
 - ・Classroomを授業資料の共有と提出場所として活用する(例えば、予習または復習用資料を適宜アップロード)。
 - ・レポート提出には期限を設定することで、授業のスケジュール管理が容易となる。
- ③ 提出課題のフィードバックに活用
 - ・Classroomを活用して教員は学生の提出物を評価し、フィードバック(全体または個別)を行う。
- ④ 授業の振り返りや質問の窓口
 - ・学生の振り返り(感想など)や質問の窓口としてClassroomを活用する(学生の学習状況の把握が容易となる)。
 - ・とくに対面授業の場合、この取り組みをリアルタイム(授業中)に行うことは、即時的フィードバック効果により、学生のモチベーションの向上や学習成果の定着を期待できる。
- ⑤ 授業のアーカイブ化
 - ・学生の学び直しによる学力向上を目的に、授業のアーカイブ化のツールとして活用する。
 - ・アーカイブ化の方法は、授業場面の録画やパワーポイント資料に音声(・動画)を入力するなどの方法で行う。
- ⑥ Classroomの活用は対面授業も含め、災害や緊急事態などでも有用で、授業の継続性を確保するのに役立つ。

以上のClassroomの推奨運用例を提示した後、令和5年度の「教育に関する実施方針」として、

1. 週一日程度の遠隔授業日(オンデマンド授業)を設定する。
2. Google classroomについて、全学科全科目(非常勤講師科目含む)について活用する。
3. Google classroomに資料をアップロードする(ペーパーレス化を推奨する。)
4. 教育日程について、曜日により15週の確保が困難であることから、不足回数分については、オンデマンド授業で対応する。(原則、祝日のある週で実施する。)

5. アーカイブ化の推進として、全科目1回以上のオンデマンド授業を実施する。

以上の項目を全教員に掲示し、またFD研修会においても「教育に関する実施方針」の協力を求めた。

4) これからの教学方針

令和6年度においては、「DX教育推進」と「初年次教育」に引き続き大学全体で改革を進め、DX教育推進に関しては新たに「学習成果可視化システム Assessmentor の導入」を設定しており、このシステムの特徴は、① 個人ごとのDP達成度の可視化、② 学生の自己認知を高めて目標設定を促す、③ 国試模擬等のデータベースとして活用、④ 学修カルテル：個人の強みと弱みを明確、⑤ 個人の学習状況に適した⇒テーラーメイド学習サポート、⑥ 学びやすい科目、学びにくい科目の明確化⇒学習カリキュラムの策定などで、更にこのシステムは、既に本大学で使用している melly：授業支援 SNS。 A-Portal：教務システム一体ポータルシステム、 E2Survey：IR向け学生調査システムとも連動しており、従来のデータを有効活用して、分析とその結果を学生へフィードバックが可能となる。またこれまでFD研修委員会で議論されていた「授業アンケートのフィードバック体制」についても、Assessmentor の導入により全ての科目において対応できる。

入学前教育と初年次教育においては、引き続き大学でより良い入学前教育のプログラムを作成して行く努力を推進する。令和6年度においては、更に新入生に向けて「精神的健康調査」のスクーリングを実施して、これにより入学時点で将来的に精神状態が悪くなりそうな学生に対して早期介入・予防的見回りが可能となる。同時に、悪化の予防と今後の心の相談室へのアクセスを良好にする目的がある。これらの結果は、アドバイザーと情報共有し、4年間の大学教育の第一歩を踏み外すことなく指導していく。

スポーツスカラー生に関しては、本年度から学生目標達成ノートの作成を指導し、目標までの道のりを細かくチェックポイントを設けて、指導していくプログラムを初めて導入した。その結果については、スポーツ振興部と学生課が協力して情報を共有し合って学生指導に当たり、学生課のアドバイザー会議等で報告し、指導に努めていく。

研究活動の実績

研究部長 林 知也

本学は全学的な「内部質保証」のために教学運営の重要事項を検討し、教学改革を迅速に遂行する目的で、教学マネジメント会議を令和3年度より設けている。

新型コロナウイルス感染症は、発生から3年余りが経過し、感染対策の徹底化やCOVID-19のワクチン普及などによって、感染法上の分類が2023年5月から「5類」に引き下げられた。2022年度から全国的にも徐々に学会大会等が順次対面形式に移行し、2023年度は学会大会の開催状況は、コロナ禍前の水準に戻ったと考えられ、研究活動に及ぼす新型コロナウイルスの影響はかなり最少になった1年であったと考える。

本年度（2023年度）の本学の研究活動における概略を項目に分けて以下に記す。

1) 本学の研究、特にヒトを対象とした研究へのCOVID-19の影響

2020年度に策定した「ヒトを対象とした研究の実施に対するガイドライン」は、新型コロナウイルス感染症の5類感染症への移行に伴い、2023年7月に「感染防止に対するヒトを対象とした研究実施の注意事項」に変更された。これにより、感染症対策を十分に行うことは依然として必要ではあるが、3年間あまり続いた新型コロナウイルス感染症対策による研究への制約はほぼ解消されたと言える。

しかし、コロナ禍によって多様化した各教員の様々な活動状態が、コロナ禍以前（2019年度以前）に戻ってはいないと考えられ、研究活動へのエフォートもコロナ禍以前のものと比べると、低下している状態であったと捉えている。それに対して、コロナ禍中に利用が拡大されたIT技術等によって学会活動や共同研究でのオンラインでのやり取りは研究活動の活発化に良い影響を残しており、2023年度もその影響は続いたと考えている。

2) 学内研究助成

① 2022年度の学内研究助成に係る研究成果発表会

- ・日時：2023年8月31日
- ・実施形式：Google Meetによるオンライン形式

ここ数年来、単年度ごとの学内研究助成に係る研究成果報告書提出と研究成果発表会実施は、翌年度に設定されてきた。コロナ禍でほとんどの教員がオンライン形式での発表に対して技術的に問題がなくなり、かつ多くの方に参加してもらうために、オンライン形式での実施となった。若手研究枠で11件、予防に関する研究枠で11件、重点研究で2件、教育改革を志向した研究枠で3件の発表が行われ、活発な質疑応答も行われた。

② 2023年度学内研究助成

2022年度から大学院生の研究サポートも目的に、教員だけでなく、大学院生も応募対

象とした。2023年度は、大学院生も対象とした若手研究枠を増額し、助成全体で760万円の予算とした。また、昨年度の病気・ケガの予防に関する研究の枠を、今年度は養生に関する研究の枠に変更した。応募件数は2019年度の38件、2020年度の28件、2021年度の24件、2022年度の28件に比し、2023年度は26件であった。残念ながら2022年度よりも件数が減少した。具体的な採択状況として、若手研究枠244.1万円（12件）、養生に関する研究枠221.3万円（10件）、重点研究枠30.0万円（1件）、教育改革を志向した研究枠0円（0件）の計495.4万円を配分した（昨年度比8.8%減）。

3) 2023年度全学横断的シンポジウム

- ・日時：2024年2月28日
- ・実施形式：対面形式（10号館21教室）
- ・メインテーマ：南丹エリアにおける地域医療と地域防災

大学の役割の1つとして、地域に果たすことができる役割を検討し、それを進展させていくことは重要である。本学は医療系の大学であり、かつ附属施設として防災救急救助研究所があることから、本年度は「南丹エリアにおける地域医療と地域防災」というテーマでシンポジウムを実施した。

柔道整復学科、鍼灸学科、救急救命学科、看護学科の順で、それぞれのシンポジストから学科特有の視点で地域医療と防災について発表が行われ、最後に防災救急救助研究所所長から、「地域と連携する大学としての防災研究について」の発表が行われた。

シンポジウム自体は2023年秋頃から計画されていたが、2024年1月の能登半島地震のこともあり、防災は喫緊の課題であり、本学が果たす南丹エリアでの地域医療と地域防災について、大変貴重な意見が交わされる機会となった。本シンポジウムをきっかけとして、今後、防災救急救助研究所だけでなく各学科との連携を密にして地域医療と地域防災に対する議論を深めることができると考えている。

4) 2023年度全学研究ポスターワークショップ

- ・ポスター掲出期間：2024年3月4日～3月25日
- ・ポスター掲出場所：10号館1階メディカルフュージョンラウンジ
- ・口頭によるポスター説明：3月6日

本ワークショップは、学内の研究者の交流を目的として毎年実施されており、本年度も昨年度と同様に、教育の業務がやや落ち着く年度末に実施した。

昨年度の12件に対し、本年度は11件と、発表数の少し減少し、コロナ禍前の状況に比し発表件数は減少したままであった。しかし、活発な質疑応答が行われ、研究者間の交流は十分に行うことができたと考える。

5) 2023年度外部資金受け入れ状況など

2023年度外部資金受け入れ状況については、次頁以降に表で示す。

科学研究費補助金受け入れによる研究は、新規採択1件（基盤研究（C）1件）、継続6

件（基盤研究（C）5件、若手研究1件）、期間延長6件の計13件が行われた（表1）。また、他研究機関から本学への分担金は6件配分された（表2）。

科学研究費以外の外部資金の受け入れとしては、日本医療研究開発機構（AMED）の助成金受入れによる研究が1件、科学技術振興機構（JST）の助成金受入れによる研究が1件行われた。その他、受託研究が1件、新規奨学寄付金による研究が2件、研究費受入れによる共同研究が1件行われた（表3）。

(表1)

令和5年度 科学研究費助成事業 (科研費)

【交付助成金】

採択年度	研究種目	研究代表者 所属職	研究代表者 氏名	研究課題	交付金額 ※R5年度	
					直接経費	間接経費
2023年～2025年	基盤研究(C)	基礎医学講座 准教授	榎原 智美	希突起膠細胞が束ねる軸索の発火特性は同調するか	1,600,000	480,000
2022年～2024年	基盤研究(C)	基礎教養講座 准教授	河井 正隆	大学教育における伝統医学(鍼灸)のモデル・コア・カリキュラムの構築と検証	700,000	210,000
2022年～2024年	基盤研究(C)	臨床医学講座 教授	浅沼 博司	遠隔虚血コンディショニングによる心不全発症・進展抑制効果とそのメカニズムの検討	1,000,000	300,000
2022年～2024年	基盤研究(C)	臨床医学講座 客員講師	林 和子	脳波の傍1Hz徐波の動態解析を用いた高齢者の麻酔モニタリング法の開発	700,000	210,000
2021年～2023年	基盤研究(C)	柔道整復学講座 教授	齊藤 昌久	いつでも速歩トレーニングが体力・認知機能に及ぼす影響：クロスオーバー試験	500,000	150,000
2020年～2023年	若手研究	鍼灸学講座 助教	岡田 岬	オピオイド誘発性便秘症に対する鍼治療の有効性の検討	100,000	30,000
2019年～2024年 【中断】 (2019年8月22日～2022年8月22日迄) 【再開】 2022/8/23～	基盤研究(C)	鍼灸学講座 特任准教授	鶴 浩幸	耳鳴軽減に東洋医学的体性感覚刺激や耳鳴反応点を用いる治療法確立のための基礎的研究	400,000	120,000
2022年 2023年(延長)	研究活動スタート支援	救急救命学講座 助教	村上 龍	法医学的情報に基づく自殺実行リスク評価法および予防因子の解明	0	0
2020年～2022年 2023年(延長)	若手研究	鍼灸学講座 准教授	齊藤 真吾	鍼通電の効果を予測する因子についての検討	0	0
2020年～2022年 2023年(延長)	若手研究	臨床医学講座 准教授	足立 孝臣	血管内皮細胞マイクロRNAを介した新しい動脈硬化治療の開発	0	0
2020年～2022年 2023年(延長)	基盤研究(C)	看護学講座 教授	田中 小百合	療養生活支援における訪問看護師の観察力を視線運動解析を用いて可視化する研究	0	0
2019年～2021年 2022年(延長) 2023年(延長)	基盤研究(C)	臨床医学講座 客員講師	林 和子	多層ニューラルネットワーク深層学習を用いたボロンカレ統合麻酔深度推定スコアの開発	0	0
2018年～2020年 2021年(延長) 2022年(延長) 2023年(延長)	基盤研究(C)	臨床医学講座 特任教授	樋口 敏宏	グリーンパティックスシステムと脳内酸化ストレスの画像化と解析による神経疾患の診断治療	0	0
					5,000,000	1,500,000

(表2)

令和5年度 科学研究費助成事業 (科研費)

【他研究機関から本学への分担金】

採択年度	研究種目	研究代表者所属 職・氏名	研究分担者 所属・職・ 氏名	研究課題	他大学より分担金 (単位:円)	
					直接経費	間接経費
2021年～2023年	基盤研究(C)	九州看護福祉大学 看護福祉学部 教授 篠原 昭二	鍼灸学講座 教授 和辻 直	ICD-11記載の経脈病証の再構築および経穴の使用頻度、経絡現象に関する研究	100,000	30,000
2021年～2025年	基盤研究(B) (補助金)	京都大学 医学研究科 講師 細川 陸也	看護学講座 教授 桂 敏樹	社会情動的スキルの発達を促すプログラムの開発と大規模介入研究による効果検証	30,000	9,000
2019年～2023年	基盤研究(A) (補助金)	山口大学 大学院創成科学研究科 孔 相権	臨床医学講座 客員講師 三谷 智子	要介護高齢者の脳活動と表情測定による視覚-嗅覚-聴覚を考慮した空間評価表手法の提案	200,000	60,000
2022年～2025年	基盤研究(B) (補助金)	生理学研究所 システム脳科学研究領域 福永 雅喜	基礎教養講座 教授 梅田雅宏	ヒト全脳皮質層別イメージングとMR分光画像法による脳回路制御動態描出法の開発	450,000	135,000
2022年～2025年	基盤研究(C)	朝日大学 経営学部 准教授 神谷真子	救急救命学講座 教授 智原栄一	鎮静・麻酔薬による腫瘍内免疫細胞の細胞間ネットワークの改変とそのメカニズム	100,000	30,000
2020年～2023年	基盤研究(C)	大阪経済大学 人間科学部 教授 大橋純子	看護学講座 教授 桂 敏樹	高齢化が進むニュータウンでの住民が実践できる閉じこもり改善支援プログラムの開発	20,000	6,000
					900,000	270,000

(表3)

令和5年度 外部資金一覧表

区分	件数	受入額	備考
科学研究費助成事業 (科研費)	16	7,670,000	※間接経費含む
日本医療開発機構公募事業 (AMED)	1	650,000	「統合医療」に係る医療の質向上・科学的根拠収集研究事業 ※間接経費含む
文部科学省事業(JST)	1	2,200,000	先端研究基盤共用促進事業 ※間接経費含む
受託研究	1	600,000	SECカーボン(株)
奨学寄附金	2	800,968	協和キリン(株)、大日本住友製薬(株)
共同研究	1	150,000	日進医療(株)
寄付講座	1	300,000	セイリン(株)
市販後調査	1	583,000	田辺三菱製薬(株)、小野薬品工業(株)
地域連携支援事業	1	200,000	南丹市まちづくり交付金
外部助成金	2	1,890,000	(公財)勇美記念財団、(公財)日本科学協会
合計	27	15,043,968	

PDCA表

令和5年度	鍼灸学科		PLAN（計画）の内容：学力的な問題による退学者数及び留年者を0にし、2年進級時に必修科目の単位取得率100%の者を80%以上にする。例年未修得者が多くなる解剖学Ⅰ・Ⅱ生理学Ⅰ・Ⅱの単位取得者をクラス全体の80%以上にするために、学力に問題がある学生を抽出し、面談によって勉強への取り組み方や勉強の仕方を聴取してその対応を検討し、個別に対応することで学力向上を目指す。また、出席数の不足によって評価を受けることができなくなる学生を未然に防ぐ。さらに、退学や休学の原因となる大学への不適應感の形成を防ぐ。		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
初年次教育 1. 学力に問題がある学生の抽出 2. 国家試験科目のフォロー 3. 出席状況を常時モニタリングする 4. 大学生活への不適應感の形成を防ぐ 5. アドバイザーと教務助手が連携した学生のサポート	1. 入学前教育の課題、オリエンテーションで実施した基礎学力テストの結果、国家試験科目の小テスト、前期中間試験結果を参考に低学力者を抽出する。 2. 1. で抽出した学生に対して勉強の指導等を個別対応で実施する。 3. 出席基準が厳しい実習科目では、1回欠席で注意を促し、2回目の欠席で嚴重注意を行う。 4. 定期的な面談を実施し、日常から声かけを積極的に行って学生の状況を把握する。 5. アドバイザーと教務助手が連携し、成績不良者への面談や勉強の方法を教えるなど、細かなサポートを行う。	100%	1、2. 解剖学Ⅰ、生理学Ⅰの小テスト結果から、得点率が5割未満の学生(17/47名)を抽出し個別対応を行った。解剖学Ⅰ・Ⅱ、生理学Ⅰの単位修得率は97.3%、生理学Ⅱは94.6%で、1年終了時に必修科目の単位取得率100%の者は32/38名(84.2%)であり、留年者は0であった。 3. 注意を行った結果、出席基準を下回ったことにより不可(受験不可)となった学生は1名であった。 4. 前期と後期に面談を実施した。勉強に問題がある学生はその都度呼び出して面談を行った。 5. 試験前だけでなく日頃から勉強に不安のある学生に対して個別対応を行った。	1、2. 基礎学力テストの結果と単位修得率は必ずしも一致していなかったが、解剖学、生理学の小テストが指標となった。 3. 本人だけでなく保護者とも連携したが、受験不可を防げなかった。 4. 実行した。 5. 学力が向上しているのかを評価できていなかった。	1、2、4、5. 解剖学Ⅰ、生理学Ⅰの小テストを基準に、低学力者を抽出する。目標は達成できたものの、1年配当科目の単位取得率100%を達成できなかった者5名のうち2名は複数科目が不可となっていたため、抽出後の対応を早期に実施する。 3. 出席基準を下回って不可となった科目(1名)は非常勤科目のため、ポータルサイトで出席状況の確認頻度を上げる。 1～5. スタート時47名(留年者1名)であったが、退学者が9名出てしまった。学力的な問題による退学者はいなかったものの、不適應感(ミスマッチ)による各退学者が多くいたため、職業イメージを持たせるような取り組みを行う。

令和5年度	鍼灸学科		PLAN（計画）の内容： 令和2~4年度のデータ（未修得科目数と合格率および模擬試験得点と合格率など）に基づいた具体的な目標を学生に提示し学修指導を行う。これにより3年生の国家試験の合格者を全国平均以上とし修了認定率を90%、新卒4年生および既修了認定者の合格率を90%以上とする。		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
鍼灸学科国家試験対策委員会 1. 令和5年度国家試験対策ポリシーを策定する。 2. 国家試験対策チームを編制し担当制を実施（3年生担当、4年生担当、教務助手）。 3. 第31回はり師・きゅう師国家試験結果と3年生進級時での学修状況（未修得科目）と模擬試験結果との関連について調査分析する。 4. 明治東洋医学院専門学校との合同模擬試験の2回と外部模試2回実施。 5. 模擬試験の成績不振者に対する面談とデータに基づく学修指導。 6. 学生の特性に応じた学修環境の設定。 7. 長期休暇期間及びコロナ感染症下におけるオンライン学修環境の設定。 8. 受験年次の希望調査。 9. 週一チェックテスト。	1. 策定済み。 2. 編成済み。 3. 調査分析済み。結果は令和5年度オリエンテーション期間および鍼灸総合演習Ⅰの第1回目の授業で3年生にフィードバック済み。併せて2年生についてもオリエンテーション期間に同様の内容を説明し、2年生での学修の仕方について説明した。 4. 第1・2回模擬試験を実施済み。第3回実施の合同模擬試験を今後作成予定。 5. 第1回模擬試験結果（得点率45%未満）かつ未修得科数（1科目以上）に基づいて面談実施済み。今後模擬試験ごとに実施予定。 6. 面談時に学生の学習環境を確認し、必要に応じて教員室周囲での学修を推奨。 7. 令和4年度実施内容に基づいて実施予定。 8. 面談時に確認済み。面談学生すべて3年次受験希望。（その後、1名の学生が4年次での受験を希望した。） 9. 国家試験まで継続実施した。	100% 実施済み。	当初の計画に基づき実施した。 今年度取り入れた週一チェックテストは特に大学への登校が低下する4年生に対して登校を促すきっかけとなった。 今年度の修了認定は、3年生においては認定対象者15名（3年次受験希望者）中、12名の修了が認定された（認定率80%）。なお、当初は3年次での受験を希望していた1名の学生がスポーツを優先するため4年次での受験に変更した。一方、4年生は認定対象者10名中、3名の修了が認定された（認定率30%）。合計は認定対象者25名中、15名が認定された（認定率60%）であった。 次に合格率は認定者15名中、はり師・きゅう師ともに7名が合格し、合格率は46.7%となった。新卒者（晴眼者）の合格率の全国平均ははり師86.2%、きゅう師86.6%で全国平均から大きく下回っていた。 認定率（▼30%）、合格率（はり▼39.5%、きゅう▼39.9%）ともに当初の目標から大きく下回っていた。	1) 国家試験対策ポリシー 2) 令和5年度模擬試験結果・経時的变化 3) 面談者リスト（メリー） 4) Googleクラスルーム国家試験対策ルーム（課題、学習資料） 5) 国家試験後アンケート結果 6) 週一チェックテスト 7) 教務助手による個別対応実施 8) はり師・きゅう師国家試験合格結果（3月26日発表）	4年生の修了認定率が特に低かったが、個別面談において授業がない時にも大学に登校し自習するように繰り返し約束をしても守らない学生が多かった。過去の結果からも4年次での国家試験の合格は非常に困難であるため、3年次での合格を目標に指導を行うことが必要である。3年次に修了認定されない学生は原級留置などを考慮する必要がある。 今年度の3年生は全体的に学習への取り組みが遅く、修了認定されてはいるものの学力が十分ではなかった。特に再試験で修了認定された学生はその傾向が顕著であった。再三面談して取り組むように指導しても、最後はなんとかしてもらえると発言する学生が複数いた。次年度も引き続き厳格な対応が必要である。 3年次からの国家試験対策では十分でなく、初年次からの対策（学習習慣の定着、成功体験の経験など）がより重要となる。

令和5年度	鍼灸学科		PLAN（計画）の内容：昨年度の進路決定率は100%であり、今年度も同様に100%を目標とする。また、コロナ禍による社会不安の影響を受け、近年の学生では進学や一般職を希望する学生が増加しており、そのことも踏まえた対策を含めて活動を行う。就職率100%達成のための施策として、求人情報の整理と共有、合同就職説明会の早期開催、一般職希望学生への支援強化を骨子として活動を行う。		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D：計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C：目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A：課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
キャリア支援 1.就職アンケートと面談の実施 2.求人情報の整理と求人検索NAVIの活用 3.合同企業説明会の企画・運営 4.進学、一般職希望者への対応強化 5.各学科のキャリア情報の集約と共有	1.5月時点で就職アンケートと面談を完了し、詳細な進路希望の聴取まで完了した。 2.4月時点で求人情報の整理ならびに求人検索NAVIの周知は完了した。 3.合同企業説明会を7月までに2回予定しており、準備も遅滞なく進んでいる。 4.進学や一般職希望者には個別に対応中である。進学説明会を前期に2回実施し、一般職希望者には「京都新卒応援ハローワーク」の活用を促すなど、早急な就職活動を指導している。 5.キャリア支援委員会を中心に、各学科の情報集約、情報共有を行っている。	60%	1.5月実施の就職アンケートと面談に基づき、学生の就職希望状況は把握できた。 2.キャリア支援室の利用に関して学生に告知し、求人検索NAVIに企業面談の結果をの掲載を開始した。これにより学生の利便性・有益性が向上した。 3.キャリア委員会での決定に基づき合同企業説明会を7月までに2回実施した。 4.進学、一般職希望者に関しては進学説明会の開催と個別対応の結果、遅滞なく進路決定できた。 5.キャリア支援担当者に情報集約・共有を行い、問題発生時にはキャリア支援委員会にて共有している。	1.学生アンケート、2.学生SNSの履歴ならびに求人検索NAVIの利用履歴、3.合同企業説明会の学満足度調査、4.進路決定届、5.1-4の資料の共有を評価の根拠としている。	1.学生の希望進路について、早期からより具体的な希望内容を把握する必要がある。 2.求人検索NAVIに企業面談の結果を掲載し、その件数を増やすことで利活用を押し進める必要がある。 3.スポーツ関連学生の進路の幅を広げるため、トレーナー活動を行っている企業を優先的に合同企業説明会に招待する必要がある、すでに次年度の計画として検討している。 4.進学に関する説明会の時期を再検討する必要がある。 5.キャリア支援委員会の定期的な開催による学科間の情報共有が必要である。

令和5年度	鍼灸学科		PLAN（計画）の内容：スポーツスカラー		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
スポーツスカラー 1. 留年率・退学率の抑制 各クラスアドバイザーよりスポーツスカラー生の情報を共有頂き、問題のある学生については早期に個別アプローチを行なう。 2. 学業成績の共有 スポーツスカラー生の学業成績を定期的に部長・指導者の方々と共有し、対策が必要な場合は講じる。	教員会議での情報共有 中間・期末試験の結果共有	100%	留年率 0% 退学率 0% 国家試験 3年生 3名/5名 *うち1名は未受験 未修得科目数 2年 1名/18名 3年 3名/14名 4年 1名/5名	留年者数 0名 退学者数 0名 国試合格率（60%）	スポーツ振興局ならびにクラブ指導者との情報共有を継続して実施していくことで、スカラー生の留年・退学の抑止ならびに成績不振の予兆を事前に察知し、サポートしていく必要がある

PDCA表

令和5年度	柔道整復学科		PLAN（計画）の内容：入学後の学修に備えて、グループ学習を通じ学生間の交流を深める。		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
入学前教育 1. 入学後の学生の孤立防止のため学生間のコミュニケーションを図る。 2. グループワーク学習法を習得する。 3. 入学後のオンライン授業に向けて、パソコン等の使い方を習得する。 4. 基礎医学の習得がスムーズに行えるよう、基礎学力を身に着ける。	1.Google classroom、Google formsを使用した課題を実施する。 2.Google Meetを使った交流会を実施する。 3.基礎医学等の基本的な内容について学修する。	100%	・11～2月の間、オンラインで2回、対面で1回実施する。 ・2回のオンラインでは、在学生が参加。会話が弾む。 ・1回の対面のフライドチキンを題材にした解剖学では、参加した皆さんから新鮮な学びがあったとの感想があった。しかし、交流が深められたかどうか疑問。	課題： ・オンライン：Meetの操作に慣れる ・対面での開催時間→フライドチキン解剖学（90分）だけでは、交流が不足。	・回数は4回（オンライン3回、対面1回） ・対面での開催時間は2～3時間程度必要 ・フライドチキン解剖学+レクリエーション ・オンライン、対面とも在学生の参加が必須。

令和5年度	柔道整復学科		PLAN（計画）の内容：職業の理解と将来目標の設定、留年・退学者数の減少		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D：計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（％）	C：目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A：課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
初年次教育 1.学習目的を明確にする。 2.学習意欲を高める。 3.予習・復習の習慣を身に付ける。 4.医療従事者として目標とする職業の理解 5.目標達成の為に大学4年間の勉学方法の理解	1.面談を実施し個別指導を行う（年2回以上）。成績不良者に対しては適宜面談を行う。 2.放課後時間を活用し授業のフォローを行う。 3.予習・復習の方法を指導する。 4.学習支援課と連携し成績不良者の早期対応（面談と個別指導）を行う。 5.職業紹介と、模擬実習（early explosure）。 6.クラブの顧問や科目担当者と連携し学習指導を行なう。	90%	1～3.ホームルームの実施回数が減少したため授業フォロー、学習指導等が出来なくなった。 4.成績の確定が遅れたため成績不良者への対応が遅れた。 5.就職説明会への参加を促すことができた。 6.情報共有はできるようになった。	1～3.時間割と担当者のスケジュールが合わない。担当者が繁忙のため。 4.コロナ等により試験の実施し期間が延長したため。	入学する学生の学力の低下に伴い、指導回数、指導時間は増加する傾向にあると考えられる。サービス向上には人員の増加、アドバイザー・授業担当者・教務の連携と共通認識、低学力者の早期発見・学習指導等のシステム構築が必要と考える。

令和5年度	柔道整復学科		PLAN（計画）の内容：柔道整復学科基礎科目の理解		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
柔道整復学科基礎科目の理解 1.国試に関連した知識の習得 2.成績不振者の減少	1.専門科目と連動した基礎知識の教育を実施するとともに、教育課程の継続的な評価、見直しの実施。 2.国家試験出題基準に準じる内容の教科書使用。 3.放課後時間を使用しての補習授業実施。	100%	<ul style="list-style-type: none"> 専門科目と連動した教育課程に従って、シラバスを作成。 各分野ごとに内容を細分化したシラバスに沿って授業を実施。 全国柔道整復学校協会監修の教科書を使用。 教科書の内容に沿いながら、教科書だけでは理解しがたい部分を補足し、学生が理解しやすい授業を実施。 Googleフォームでの小テストを数多く実施し、知識の確認と修得を効率良くサポート。 オンデマンド形式での補講を実施。 オンデマンド補講、講義資料の配布、Googleフォーム使用時にGoogle Classroomを活用。 	<ul style="list-style-type: none"> 小テストや期末試験での正答率の低い内容を、学生の理解度が低い、もしくは苦手な内容として把握。 解剖学、生理学系の各科目で、単位修得率はそれぞれ95%～100%。 入学時の学力のばらつき拡大が課題。 	<ul style="list-style-type: none"> 正答率が低い内容について、より理解を深めさせるために講義資料を改善。 学力のばらつきを考慮した種々の形式での授業を検討・実施。

令和5年度	柔道整復学科		PLAN（計画）の内容：柔道整復学科専門科目の理解		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
柔道整復学科専門科目の理解 1. 柔道整復師としての知識、技術の習得（実技・実習・講義） 2. 技に精通した柔道整復師をゲストスピーカーとして招待 3. 国家試験に準じた授業内容の強化	1.臨床実習を通して、より具体的な授業とすることで実践力を身につける。 2.共通科目が連動した教育を実施するとともに、教育課程の継続的な評価、見直しの実施。 3.非常勤講師採用の再検討。	50%	昨年度までに見られた問題点を改善するため、大学の目的を非常勤講師に理解していただき、これに基づいた指導を実施していただけたが、事前のう合わせを十分に行うことができず、非常勤講師間で重複した指導をさせてしまった現象が見られた。 講義と実技、実習を一連の流れとして段階的に構成することで、柔道整復師としての知識、技術の習得を目指すことができたと考える。	非常勤講師については担当者表にて確認し、シラバスの内容を見直した。	大学で履修系統図とシラバスを照らし合わせて講義内容が重複しないように計画を立てる。

令和5年度	柔道整復学科		PLAN（計画）の内容：学外実習における教育効果の向上		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
学外実習における教育効果の向上 1. 接骨院での業務の把握 2. 付属病院でのチーム医療について理解 3. スポーツ現場におけるケア活動の理解 4. 介護施設での業務体験	1. 各種実習の評価をその実習に適したルーブルック表にて評価する。 2. 実習に関するレポートを作成し提出する。	100%	臨床実習で外部接骨院、附属病院、スポーツ大会、介護施設を設定し、各実習で実習中の様子と実習後のレポートをルーブルック表を用いて評価できたので十分に計画を遂行できたと考える。	実習簿とレポートの一部はgoogle classroomに保存、レポートの一部と、ルーブルック表は個人のパソコン内に保存	実習によっては、指導者によって実習内容に差異が生じている場合があるので、実習内容の見直しを行い、学生の修学内容やその理解度の均一化を図ってきたい。

令和5年度	柔道整復学科		PLAN（計画）の内容：国家試験合格率の改善		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
国家試験合格率の改善 1. 国家試験対策委員会を編成 2. 面談による学習意欲のスクリーニング 3. 模擬試験の実施 4. 個別指導の充実	1. 委員会による担当科目や対策の具体化と実行。 2. 個別面談によるスクリーニングの実施。 3. 模擬試験を8回実施(学内4回、学外4回)。	100%	1.委員会による担当科目や対策の具体化と実行。具体的には以下のことを行った。 ①模試ごとに一般問題の成績が下位30%の学生を対象に補講 ②成績上位の学生が成績下位の学生に教えるグループワークを10月上旬まで実施 ③チューター制度として成績下位の学生に対して教員による個別指導を10月中旬から実施 ④中間層の学生には主に教務助手によるサポートを実施 2.模試の成績に基づいた個別面談によるスクリーニングを実施。 3.模擬試験は学内模試7回、学外模試を4回実施。	1.国家試験にて点数配分の大きい4教科（解剖、生理、柔理、一般臨床）についての配分の増加。必修対策授業の大幅増加。以上により必修のみ不合格であった学生の大幅減。しかし、必修問題に関しては、過去問等のデータが少ない、医療概論や社会保障が課題。 2.下位層の学生自身の、早期現状理解が課題。 3.模試回数の増加と模試に関する解説の実施。	1.医療概論や社会保障に関しては専門の先生による授業等により正答率を改善。 2.成績下位層学生の早期現状理解に対しては小テストや課題を実施 3.模擬試験に関しては本年度の実施回数の維持と模試解説の継続

令和5年度	柔道整復学科		PLAN（計画）の内容：就職率の向上		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
就職率の向上 1. キャリア教育の実施 2. 合同企業説明会・体験会に参加	1. キャリア教育の授業8回 2. 合同企業説明会実施	100%	学生が希望する就職先への斡旋を目標として実践。すべての学生に提供するのは形式的に工夫が必要である。	就職率100%	開催日が週末だったため、クラブ活動(大会等)で参加できない学生が数名存在した。対策案として、数回ある内の1回はオンライン開催、あるいは平日の開催を検討する。

令和5年度	柔道整復学科		PLAN（計画）の内容：研究活動の活性化		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
研究活動の活性化 1. 学内研究助成の申請、実施を行い研究活動の活性化 2. 外部資金を獲得し研究活動を充実	・学内研究助成により研究の基盤を作成 ・科研費など外部資金獲得に向け研究内容の充実	50%	1.学内研究に関しては4名が申請を行い、研究中であるが、申請していない方も多い。 2.外部資金に関しては2名が申請をしているが、獲得できていない。	研究を実施している教員が少ない。	国試対策、講義の準備などで、研究を行う時間がない。 →教員の負担の分散化を図る。研究の推進を後押しできる環境、研究実績を評価して頂けるハード面を整える。

PDCA表

令和5年度	救急救命学科		PLAN（計画）の内容：国家試験合格率の改善		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
国家試験合格率の改善 1. ゼミ単位の国家試験合格に向けた学生の個別支援体制の確立。 2. 模擬試験の予定及び結果解析と個別指導への反映。 3. 国家試験全員合格を目標とした強化クラスへの講義。	1. 成績不良学生の個別指導と補習授業を実施した。 2. 模擬試験の時期と回数を検討し結果解析から、個別指導に役立てた。 3. 分野別に各教員で特別講義を実施し底上げ指導をおこなった。	90%	・ゼミ毎に対応の差が生じた。 ・成績にバラつきがあったため（上位と下位の差が大幅にあった）範囲を絞り込んだ対策に苦戦した。	国家試験の合格率 98.3% （60名中/59名） ※全国平均95.3%	・指導者スキルの再確認に併せ、対策範囲とメンバーの選定を改める改善。 ・他業務との調整が厳しく、集中した対策を提供できるように改善。 ・マンパワー不足の改善。

令和5年度	救急救命学科		PLAN（計画）の内容：研究活動の活性化		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
研究活動の活性化 1. 学内研究助成申請と研究実施、成果の報告と論文作成 2. 外部資金の獲得 3. 学科内で研究の検討会を実施 4. 大学院進学への推奨 5. 研究日の確保と研究環境改善	1. 学内研究助成申請や研究実施に動き出した 2. 科研費応募に向けて書類作成に取り組みだした。 3. 研究検討会を実施。 4. 大学院進学し学業に取り組む 5. 研究日の確保実現とタスクコントロールを実施。	50%	・教務業務が多く理想とする研究への取り組みには至れなかった。昨年同様、教育業務に追われ研究への時間スケジュールの確保に苦戦した事である。	学内研究助成 3本 科研費 1本	・業務整備と時間割整備が重要である。そこから研究日などの設定が確保できるように計画

令和5年度	救急救命学科		PLAN（計画）の内容：就職支援の改善、強化		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
就職支援の改善、強化 1. 求人情報のデータ化での管理（消防、他の公務員、病院、一般企業など） 2. 公務員試験支援 3. 消防受験のための個別指導 4. 就職支援のための教員による学生の個別支援体制の確立	1. 求人情報の集約、掲示、データベース化を実施 2. 公務員試験支援のためのカリキュラム内容を検討。 3. 公務員受験の小論文、面接指導を実施。 4. 各教員にて就職のための個別指導を実施	40%	・就職活動計画への取り組みが遅い ・キャリア支援の環境が無いため学科内でのサポートに限界がある。	公務員希望47名中 公務員内定率 38名（78.7%） 上記のうち 消防希望者44名 消防内定率 28名（63.6%）	・キャリア支援の設立 ・マンパワー不足の改善 ・学生自身の就職活動計画についての意識改善指導

令和5年度	救急救命学科		PLAN（計画）の内容：初学者教育の強化・改善		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
初学者教育の強化・改善 1. 学習困難者の把握 2. 国語力の向上 3. 学習支援体制の強化 4. 生活環境の変化に順応する支援	1. 基礎学力テストの結果把握、個別面談を実施する。 2. レポート課題に対する個別のフィードバックを行う。 3. 学習支援協力教員に1年アドバイザーを配置する。 4. 個別面談やクラス委員を通じて状況を把握し支援を行う。	65%	・人数も多いため、個々の学生をインプットするのに時間を要するためクラスコントロールに苦戦をした。 ・苦戦した中でも、休退学者を最小人数で抑えられた。 ・基礎学力の対策指導計画が思うように結果に繋がらなかった。		・マンパワー不足の改善 ・基礎教育の計画の再検討 ・コロナ感染対策の緩和から、従来の様に学生間の交流が多くできる学びの環境づくりの計画。

PDCA表

令和5年度	看護学科		PLAN（計画）の内容：		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
<p>1. 基礎医学及び疾病論の科目と看護学専門科目との連携を強化する話し合いの場を設定し、同意内容の履行確認と課題の洗い直しを行う</p> <p>2. 成績評価を学生便覧に準じて行うと共に、各学年での試験、進級判定を適正に行い、成績不良者の学修支援とフォローに努める</p> <p>3. 4年間で段階的に学修到達度を高める、一貫したシステムを構築する</p>	<p>1. 学生便覧に準じた専門科目の再試験、単位認定の実態の確認</p> <p>2. 基礎医学、疾病論科目担当者との協議</p> <p>3. 成績評価の実態を確認し課題と対処法の見直しを協議し新たな解決策の立案</p> <p>4. 学修の段階的達成を計画に沿っての実施</p> <p>5. 成績不良者の学修レベルを高める支援</p>	<p>1.実施 100</p> <p>2.実施 100</p> <p>3.実施 100</p> <p>4.5コマ補講 100</p> <p>5.補講、ラストチャンス試験 100</p>	<p>1.確認し教員間で共有</p> <p>2.基礎医学担当者との協議し共有</p> <p>3.再試験の回数等を見直し</p> <p>4.階層的な内容を段階的に学習を進める方向性を確認し共有</p> <p>5.成績不良者の支援法を検討し、5コマ目を有効活用</p>	<p>日程表、対象者選択を行い、実施出血表にて参加者確認</p>	<p>今年度、学部教員同意の上学生便覧に従い本試験+再試験1回を実施。また5コマ目を活用し成績不良者の補講（基礎系、疾病系）を実施。しかし、再試験でも不良者がいたため、ラストチャンスを与えるが、それでも不合格者有。4年間の学習と国試合格等を考えると、学生便覧の順守は必要。</p>
<p>1. 国家試験対策委員会を新たに立ち上げ、4年間の企画を立案し、必要な予算を確保する</p> <p>2. 国試対策委員会及び選択コース教員が合格率を高めるために、模擬試験、試験後個別指導、講師依頼等対策を入学時から対策を体系的に構築し、4年間の企画案を立案し実施する</p> <p>3. 不合格者に再受験初年度対策を実施する</p>	<p>1. 委員会は昨年度を基に年次計画を立案し、計画に必要な予算、人員の獲得</p> <p>2. 入学時から体系的に基礎医学、疾病論、専門科目の模擬試験、補修、学習支援等の確認</p> <p>3. 試験後の個別指導</p> <p>4. 教育上手な講師を採用しセミナーの充実</p> <p>5. 既卒1年の不合格者を卒業後も継続支援</p>	<p>1.予算人員100</p> <p>2.5コマ目で実施100</p> <p>3.東アカ人気講師を採用し実施100</p> <p>5.連絡困難</p>	<p>1.委員会活動のPDCAサイクルを強化した</p> <p>2.入学前教育を学習支援センターと協働</p> <p>3.5コマ目の有効活用</p> <p>4.学生の評判は良好で一部は成績向上</p> <p>5.連絡が取れず、確認や支援が困難</p>	<p>年間計画、講習会参加者確認、参加状況、模擬試験成績により激励等を実施</p>	<p>国試対策は、スケジュールに沿って実施され、全国レベルの大学成績は56位に上昇。国家試験は今年度難易度が上昇したため自己採点結果は看護師に不安があるが、保健師助産師は全員合格ラインを達成。対策（方法、スケジュール等を継続する</p>

令和5年度	看護学科		PLAN（計画）の内容：		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
1. 学生情報を基に年次計画立案を企画する 2. 5コマ目に原則基礎医学、疾病論、専門科目成績不良者(2年生、3年生進級者)に補講資料配布試験を実施する 3. 5コマ目に基礎医学、疾病論等現履修者(主に2年生)に資料配布、復習を実施する 4. 講義後および試験後の個別指導を行う 5. 成績良好者の学習意欲維持向上を担保する	1. 学生情報を基に年次計画の企画立案 2. 5コマ目を活用して原則基礎医学、疾病論、専門科目の成績不良者に補講試験等の実施 3. 現履修者に疾病論等の資料を配布し復習をさせる。 4. 成績不良者の補講出席率と学習の確保 5. 講義後、試験後に個別指導の実施 6. 成績良好者にサイエンスカフェを月1回開催し、学習意欲の維持	1.企画し実施 100 2.実施100 3.実施100 4.確認100 6.年間6回実施	1.国試対策委員会、アドバイザーを中心に計画立案 2.5コマ目を有効活用 3.配布した 4.補講出席率を確認し、適宜連絡参加勧奨 6.定期的に開催し、学部生の参加もあり	講義科目成績、模擬試験結果等を勘案し、成績不良者を特定し学習支援成績優良者に新たな支援を実施	基礎系、疾病系科目群が成器不良のため、5コマ目活用、アドバイザーによる積極支援、科目担当者の補講等が辞意視されたが、必ずしも成績不良者の教育態度改善、成績向上に繋がらないケースがある。学部専門職が対応するのではなく、全学でアドバイザー以外の教育専門家による支援が必要である。
1. 学生の出席状況、成績等を把握する 2. 教務課、学生支援課と成績情報を共有する 3. 低学年アドバイザー、科目担当者、実習担当者と学生情報を共有し、連携を強化する 4. 情報共有からハイリスク者を早期に特定しアドバイザー、学生相談室等と連携対応する 5. 必要に応じ学生、ご父兄と面談を実施する	1. 学生の出席状況、成績等の把握 2. 教務課、学生支援課等との情報共有 3. 低学年アドバイザー、科目担当者、実習担当者ととの情報共有と連携強化 4. 情報共有からハイリスク者を早期に特定し、アドバイザー、学生相談室等との連携 5. 必要に応じて、学生、ご父兄との面談	1.アドバイザーによる実施 100 2.情報を共有 3.情報を共有 100 4.一部連携 5.一部面談	1.把握 2.情報共有 3.情報共有し連携強化 4.一部連携 5.一部面談	出席状況、成績不良者等を経過観察し、情報を共有し、適切な支援に方向づけ	これまでに見られた休学・退学者数は抑制傾向にある。学業不振よりも心身の疾病、家庭問題等が背景にある、支援が必要な学生が増えている。学部で対応するのではなく、全学で心理相談室、学習支援室等で、心理相談、生活相談、学習相談を専門的に担当する部署・専門職員が必要である。

令和5年度	看護学科		PLAN（計画）の内容：臨地実習専門委員会		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率 (%)	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
<p>1) カリキュラム全体を見通した臨地実習計画の検討</p> <p>2) 新カリキュラムに伴う実習配置の変更に応じた実習ローテーション表、臨地実習共通要項、臨地実習要項の作成</p> <p>3) 領域間における教員の連携、実習環境の調整</p> <p>4) 各実習施設との連携と実習環境の調整</p>	<p>1) 教務委員会、領域長会議と連携しカリキュラム全体における授業科目としての臨地実習の位置づけの確認</p> <p>2) 新カリキュラムに伴う実習配置の検討、共通要項の進級要件の検討、及び各実習における目標、実習内容の検討</p> <p>3) 月1回の臨地実習専門委員会を開催し、領域間の連携、情報共有、教員の実習指導能力の向上を図る</p> <p>4) 各実習施設との総括会議の開催における実習評価と今後の実習展開の検討</p>	95%	<p>1) カリキュラム改変に基づき、講義⇒演習⇒実習という学習の流れに基づき、各学年における実習の位置づけを確認した。</p> <p>2) 1)に基づき、実習配置の検討を行い、実習ローテーション表を作成した。また、各実習参加及び進級要件の検討を行い、学部として決定された。各領域において実習目標、内容の検討を行い、臨地実習共通要綱、臨地実習要項の作成を行った。さらに、要項の作成に関しては、WEB印刷を取り入れた。</p> <p>3) 毎月の委員会において、実習状況における情報の共有を行い、COVID-19及びインフルエンザ感染に伴う追実習や課題のある学生についての対応を検討し、領域間で連携を図ることに努めた。</p> <p>4) 各実習施設との総括会議については一覧表を作成、各領域間で調整し適宜開催、実習評価を行った。またCOVID-19の5類移行に関する感染対策については、各施設と調整を行い、臨地での実習が実施できるように努め、実習環境の提供を行った。</p>	<p>*新カリキュラム改変に基づき、領域実習を3年次に終了できるように調整した。しかし、今年は新カリキュラムと旧カリキュラムの学生の実習が重なる時期もあり調整が困難であった。</p> <p>*臨地実習共通要綱、臨地実習要項をWEB印刷することで経費削減に貢献した。</p> <p>*追実習対象の学生は例年に比較して多い状況であったが、領域間で連携し実習スケジュールの調整を行い、全員が実習参加できる予定である。</p> <p>*今年はCOVID-19の5類移行に伴い、ほぼすべての実習を臨地で行うことができ、学内実習となったのはわずかであった。</p>	<p>*本年は、新カリキュラム移行に伴う準備の段階であった。作成した実習ローテーション表が実施されるのは次年度であり、その評価も次年度となり、その後に継続できるよう検討を重ねていく必要がある。同様に、進級要件の適切性についても評価は次年度となる。</p> <p>*今年度は、実習委員会と教務委員会、領域長会議との連携を図ることができたが、実習に関わる教員の指導力向上に向けた取り組みが十分とはいえ今後検討を要する。</p> <p>*実習施設との連携については、カリキュラム移行に伴い、次年度の実習ローテーションが例年とは異なり不規則となるため、総括会議の開催次期、方法の検討が必要である。</p> <p>*今年度は、COVID-19の5類移行に伴い、実習施設の学生の受け入れは前年度よりも配慮をいただけたが、感染状況については依然として楽観は許されず、学生、教員の体調管理は引き続き行っていく必要がある。</p>

令和5年度	看護学科		PLAN（計画）の内容：看護師・保健師・助産師国家試験合格100%を目標とした内容である		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
<p>年間スケジュール及び全体の見える化</p> <p>①国試対策と総合Ⅱ・Ⅲを組み合わせ、効果的な対策スケジュールをたてる。</p> <p>②国試対策スケジュールが大学の取り組みとして、教員及び学生が認知できるように、時間割、教務日程に反映させる。</p> <p>③1年生から4年生まで全体のスケジュールがわかるようにエクセルシートを作成し、国試対策委員会で共有する。</p> <p>④上記③のシートを継続利用することで、経時的に把握できるようにする。</p>	<p>①看護総合演習Ⅱ・Ⅲの科目担当者と日程調整を行い、対策スケジュールを立案し実行した。</p> <p>②国試対策スケジュールを時間割に反映させ、教室を確保した。</p> <p>③1年から4学年の全体スケジュールを作成し、国試対策委員会で共有し、随時、修正した。また、領域長会議でも周知を行った。スケジュールには、業者模試及び解説講座、苦手克服対策を企画し、計画通り実施した。</p> <p>④チームス「2023年国試対策委員会」に③のエクセルデータをアップし、国対委員会全員が共有できるように実施した。</p>	100%	<p>4年次後期の看護総合演習Ⅱ・Ⅲでは、各領域から国試過去問を中心に取り組んだ。今年度は、看護総合演習Ⅲの中で学生によるプレゼンテーションも実施した。模擬試験の結果は、Teamsにアップするとともに、教員会議で成績低迷者に関して情報共有した。全体のスケジュールを網羅して管理することができた。</p>	<p>2/8助産師国家試験、2/9保健師国家試験、2/11看護師国家試験が実施された。業者の自己採点結果では、助産師100%クリア、保健師100%、看護師は必修問題不合格者13名、一般状況設定問題160点未満5名、160~169点未満4名であった。合格発表は3/22である。</p>	<p>自己採点の結果、必修問題の得点が80%に満たない学生が多くなっているのは、今年度の傾向が過去間には見られない問題が目立ったためであると考え。過去に一般問題として出された問題が必修問題として出されるなどの出題があり、学生の動揺が目立っていた。第113回国試は、平均点42.5とここ数年の中でも低い結果であった。</p> <p>（参考）</p> <p>第107回：平均点43.3 第108回：平均点45.1 第109回：平均点45.0 第110回：平均点46.9 第111回：平均点46.1 第112回：平均点45.7</p> <p>看護総合演習は、従来通りⅡからⅢへと計画する。成績低迷者ほど学習への取り掛かりが遅く、危機感も薄いため学生が危機感を持って学習への取り組みを早めるような働きかけが必要である。</p>

令和5年度	看護学科		PLAN（計画）の内容：看護師・保健師・助産師国家試験合格100%を目標とした内容である		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
看護師国家試験模擬試験を実施 ①全国平均と本学成績の比較データを作成する。 ②成績不良者については、対象学生に応じた有効な対策を随時検討する。 ③手作り模試1回+業者模試5回（東京アカデミー3回、メディックメディア2回）合計6回実施する。	①すべての模擬試験において、全国平均と本学平均を比較検討した。また、各学生の個人成績および自己採点結果と、看護師国家試験模擬試験結果（業者データ）を一覧にし、一括して学生の成績推移を把握し、学生指導に役立てた。 ②国家試験模擬試験終了ごとに、業者採点結果が届くまで時間がかかるため、自己採点に基づき、学生を呼び出し、学生の状況確認、勉強方法を確認した。11月以降は、成績低迷者12名の教室を確保し、出席管理のもと、受験勉強を促した。・成績低迷者には保護者に対し、手紙を郵送、またはZOOMによる面談を行い、該当学生の支援を依頼した。 ③計画していたすべての模擬試験を実施した。	100%	①計画を実施したことで、模擬試験結果の全国平均と本学平均の比較した結果、12月、1月本学は全国平均を上回ることを確認した。（12月6日東アカ本学順に95位/321校、1月10日メディックメディア本学順位59位/253校） ②成績低迷者対策は随時面談を行い、精神的サポートと勉強方法の確認をおこなった。・11月以降の成績低迷者対策からは、低迷者数が12名から3名（1月）に減少した。・12月の成績低迷者に対しては、保護者にも連絡し、大学との重層的な学生サポートを実施した。	・模擬試験結果データを一括管理したことや、計画通りに模擬試験を実施したことは、本学の受験対策に有効であったと考える。また、成績低迷者に対しても丁寧に対応したことで、取りこぼれなく受験対策を行ったと考える	・継続的に続けることが必要である。 ・成績低迷者対策は、4年生アドバイザーを中心に、国試対策委員会のメンバーで実施した。模擬試験監督等では、看護学部の教員にも参加してもらったが、国試対策は学部で取り組むのだという意識づけが必要と考える。

令和5年度	看護学科		PLAN（計画）の内容：看護師・保健師・助産師国家試験合格100%を目標とした内容である		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
国家試験対策DVD購入（全学年で使用） ①DVDを活用した国試対策講義を視聴する。確認テストを実施し、記憶の定着を図る。 ②希望する学生、成績不良者には複数回、視聴する	看護総合Ⅲ（選択科目）の授業日程の中で、3日間2コマずつ、脳神経・循環器・消化器のDVDの視聴・確認テスト・解説編PPを視聴した。（医教）	100%	学生の参加者は、看護総合Ⅲを選択履修している学生であり、1コマ当たり平均53名の出席が確認できた。確認テストは時間を要したため、DVD視聴と並行して書き取りを行うなど進め方の変更が必要となった。	受講の学生からの意見として、前もっての資料提供がほしい。	実施する時期として、国試対策の学習が進んでから実施する方が、より知識の確認ができ、有効な対策につながる
学生の自己管理を促す仕組みを導入 ①「第113回 看護師国家試験 合格への道 2023年度 私の学習成果記録」を作成する。 ②看護師国家試験模擬試験実施後は、必ず自己採点を実施する。学生自らが配点を把握することで、問題への取り組み意識を養う。また、業者採点と自己採点と同一であることを目指す。 ③学生自ら自分の苦手問題の傾向と対策を考える。 ④教員による学生面談で使用し、指導に役立てる。	①「第113回 看護師国家試験 合格への道 2023年度 私の学習成果記録」を作成し4月個人面談時に配布。自己採点と業者採点の違い、必修問題40点、一般状況設定問題165点以上を目指し、学生自ら管理する仕組みを導入した。 ②看護師国家試験模擬試験後、自己採点を実施し各自Google formへの入力を行った。当初入力方法の間違いや業者採点との乖離も見られたが回を重ねるごとに修正が見られた。 ③④教員による成績低迷者への個別指導、個人面談、mellyでの声かけを適宜実施し、学生の苦手問題の対策や個人的な悩みなどの相談にも対応できた。	100%	①合格への道の作成と配布は、学生が成績状況を自己管理するのに役だった。しかし、全員の記入状況の確認は曖昧で活用に関しては成績低迷者に限られていたと考えられる。 ②看護師国家試験模擬試験後、Google formに自己採点結果を入力したが、学生自身も自分の結果に向き合い、教員も成績把握ができたため有効であった。しかし、一部学生の入力ミスがあり修正するケースが見られた。 ③④教員による成績低迷者への個別指導、個人面談、mellyでの声かけを適宜実施し、学生の苦手問題の対策や悩みなどの相談にも対応した。以上のことから、学生の自己管理を促す仕組みの導入は概ねできたと判断する。	合格への道の学生の記入状況の未確認看護師国家試験模擬試験後、自己採点を実施し各自Google formへの入力率は100%	①合格への道の作成配布は今後も継続が望ましいが、学生の記入状況を把握するため面談時に提出する、mellyにアップさせるなどの工夫が必要と考える。 ②看護師国家試験模擬試験後、自己採点を実施し各自Google formへの入力率は継続の価値はあるが、学生の入力ミスが起きない様項目を減らすなどの工夫が必要となる。 ③④教員による成績低迷者への個別指導、個人面談、mellyでの声かけを適宜実施は有効であったが、成績低迷者の基準ラインをどこに置くか、どのような対策が必要かは学生とともに検討していく方が望ましい。

令和5年度	看護学科		PLAN（計画）の内容：看護師・保健師・助産師国家試験合格100%を目標とした内容である		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
予備校外部講師の導入 ①経済的理由のため、受験対策として予備校に通えない学生がいるため、全学生に対して予備校講師による講義を大学で保証する。②東京アカデミー外部講師による苦手分野克服講座（制度、成人、高齢、在宅）を導入③東京アカデミー国家試験模試をするたびに、模擬試験解説講座を実施する。	東京アカデミー外部講師による苦手克服講座を3日間・各3コマ開催した。また東京アカデミー模試を3回実施し、後日の模試解説を実施した。	100%	苦手克服講座、模試解説共に、テキストに沿いながら、講師陣の講義内容の理解がしやすいとの意見があった。模試解説セミナーでは、模試結果を含めての解説であったことが有効であった。苦手克服講座は冬季になるにつれて体調不良を理由に出席率の低下がみられた。	・学生からの講師陣についての評価・東京アカデミー模試3回目結果：必修・一般状況共に全国平均より高得点となり、順位も上昇した。	模試解説セミナーの3回目は、本学の試験結果が出た後に模試結果を反映した弱点を説明もらえるように1月に入ってからの時期が望ましい。
学生負担金の軽減 ①教育振興会の助成を受ける（教務課が対応） ②予備校外部講師の導入にあたり、学生負担金が増額しないように、看護学部国試対策予算UPを検討する。	教育振興費補助金1人当たり5000円×72名学生負担金を10000円に削減ことができた。 <支出内訳> 東京アカデミー模試3回 345600円 東京アカデミーテキスト 424800円 メディックメディア模試2回 138000円	100%	メリーで学生に事前通知し、全員支払い完了 計画的に模擬試験を2社で実施。年度当初は手作り模試で年間6回実施。		メディック模試は学年が違っても、3回分一緒に申し込むと割引があるので、年度当初に全体で調整してまとめて申し込むとよい。
全体会計 ①予算増額に伴い、会計監査を置く70万から120万に増額。 *系統別看護師・保健師国家試験問題WEB法人 サービス料（医学書院）（株）神陵文庫11万円が国試予算から教育予算に変更したため、実質的には60万円の増額となっている。 ②4年生を優先して予算を組み立てる。 ③1年～3年生に対し、セミナー代金として3万円を支給する。 ④保健師7万円、助産師3万円支給する	学部予算 学部教育予算 1200000円 会計監査：玉井先生支出 セミナー補助 1113698円 <内訳>1年 0 2年 29000円 3年 29620円 4年 看護師 960000円 4年 助産師 30000円 4年 保健師 65078円 諸雑費（壮行会、合格祈願等）81721円 計 1,195,419円	100%	・保健師国家試験問題WEB法人 サービス料（医学書院）（株）神陵文庫 11万円 及び医教DVD3巻 解剖生理と疾患をつなぐ要点速習シリーズ81,000円を 国試予算から教育予算に変更したことにより、国試対策予算を有効に活用できた。・模試結果が、後半には全国平均を超えたことから、今年度新たに取り組んだ、東京アカデミー苦手克服講座・模試解説セミナーの実施は効果的であったと考える		・国試対策DVD・書籍等は次年度以降も活用できる。 ・1年生は模試のみでセミナーは未実施、今後も同様に補助は不要。

令和5年度	看護学科		PLAN（計画）の内容：看護師・保健師・助産師国家試験合格100%を目標とした内容である		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
学生への情報提供と面談 ①東アカフレンドに登録する。国試傾向最新情報を入手する。 ②業者案内一看護師国家試験勉強室に提示し、学生が自由に閲覧できるようにする。 ③随時、メリーを活用し、学生に情報提供をする。未読者に対しては個別に指導する。 ④4月～6月の間に、アドバイザーによる学生個人面談を行い、国試への取り組み、生活状況、就職活動について確認する。	①東アカフレンドに全員が登録し、国試傾向最新情報やセミナー情報を東アカから発信できた。 ②業者案内を看護師国家試験勉強室に提示し、学生が自由に閲覧できるようにした。 ③Mellyを活用し、学生に情報提供をする。未読者に対しては個別に再三発信した。 ④4月～6月の間に、アドバイザーによる学生個人面談を行い、国試への取り組み、生活状況、就職活動について確認できた。	100%	①東アカフレンドに全員が登録し、国試傾向最新情報やセミナー情報を東アカから発信できたことで、学生がタイムラグ無く情報を得ることができ、教員の仕事量の軽減もなった。 ②業者案内を看護師国家試験勉強室に提示し、学生が自由に閲覧できるようにしたが、勉強室の利用者が限られていたため、提示の都度学生に知らせることもできたと考ええる。 ③Mellyを活用し、学生に情報提供をする。未読者に対しては個別に再三発信したことで全員に情報提供できたと考ええる。 ④4月～6月の間に、アドバイザーによる学生個人面談を行い、国試への取り組み、生活状況、就職活動について確認でき、その後も適宜学生へのMellyでの声かけや面談を実施できた。	Mellyでの情報提供は100%	①東アカフレンドに全員が登録し、国試傾向最新情報やセミナー情報を東アカから発信することは継続が望ましい。 ②業者案内を看護師国家試験勉強室に提示は勉強室の利用者が限られていたので、提示の都度学生に知らせるなどの工夫が必要。 ③Mellyを活用し学生に情報提供をすることは、本学のシステム上有効な手段であり教員全員が見れ未読の把握もでき継続する必要がある。 ④4月～6月の間のアドバイザーによる学生個人面談は、国試への取り組み、生活状況、就職活動について確認でき年度当初に面談を行うことは有用と考える。

令和5年度	看護学科		PLAN（計画）の内容：看護師・保健師・助産師国家試験合格100%を目標とした内容である		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
教員間の情報共有 ①チームスの活用 ②国試対策委員会で、献本や国家試験対策DVDを管理必要とする。原則持ち出し禁止とし、国試対策室で管理する。 ③1～2か月の定期的な会議開催 ④教員の役割分担を明確にし、シームレスな連携を図るようにする。	①看護師国家試験対策委員会のチームスを作成し、PDCAサイクル、医教DVD資料、国試対策スケジュール、国試模擬試験結果、図書館リスト、模擬試験手順および遅延者対応、予算、学生負担金、模擬試験・苦手講座等出席状況などの情報を共有した。 ②看護学部へ送られる献本を国試対策委員会で管理して8階国試対策室書庫に保管し、学生が閲覧できるようにした。国試対策で購入したDVDは鍵のかかる書庫で保管した。 ③対面会議9回、随時、メール会議を実施した。 ④教員の役割分担を行った。教員の担当学年にこだわらないシームレスな連携を図った。	100%	①随時、チームスの情報は更新されており、常に最新情報が把握できていたため、目的は十分に達成したと思われる。 ②献本を活用することで、予算削減にも役立てることができ、図書館との情報共有も行えたため、十分に達成できたと考えられる。 ③模擬試験結果の共有と対策など、随時、対面で実施できた。一方、実習や授業等により会議に参加する教員に偏りがあったため、課題である。 ④教員の役割分担を行ったが、役割分担に示されていない業務があったため、整理が必要である。	①チームス活用100% ②すべての献本を活用 ②総合Ⅲで国試対策費で購入したDVDを活用 ③必要時、随時開催していたが、不定期開催が多かった。 ④役割分担外の業務は委員長を中心に行うことが多かった。	①継続してチームスを活用し、情報共有を促進していく必要がある。 ②献本を活用し、経費を節約することを継続する。学生の希望する参考書や問題集について、ニーズを把握し、補充していくことを検討していく。 ③年間スケジュールを参照し、定期開催を目指して可能な限り日時を決める。また、全員が参加するように啓発をする。 ④役割分担外業務を明らかにしていく必要がある。改善しやすい業務から次年度取り組んでいく。例) 図書管理係、模擬試験・苦手講座出席表作成・管理係、国試対策会議日程調整係など

令和5年度	看護学部		PLAN（計画）の内容：看護専門職を目指す看護学生として、基礎作りである1年次に主体的に自己学習および生活習慣が調整できるよう働きかけと支援を行う。特に個別に支援が必要な学生を早期に見出し、個別支援を行う。		
PLAN（計画）	DO（実行）		CHECK（評価）		ACTION（次への改善）
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率（%）	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
<p>1.学生支援（看護学部1年アドバイザー）</p> <p>①個人面接 ②クラスアワーの実施 ③.mellyによる支援</p> <p>新入生オリエンテーション時の支援</p> <p>クラス懇談会（大永）</p>	<p>4月1日時点での学籍状況（新入生68名+留年生1名 = 69名）をアドバイザー4名で分担支援した。但し、教授と准教授は助教の分担学生も必要時支援した。大永：01-14番、梶川：15-34番、村上：35-48番、田中：49-68番+留年生</p> <p>①4月～5月に個人面接用紙を作成し、初回面談を実施した。 必要時、教員の要請、もしくは学生の希望により実施 12月7日 定期試験が開始され始めたので、教務課から配布された資料に基づき、成績下位1/4と、小児看護の再試対象者20名を選出し、緊急個人面談を実施</p> <p>②4月入学時、前期定期試験前、後期開始時、後期試験前と終了時の計5回実施した。</p> <p>③欠席者への配慮と口頭説明への理解不足を補うため、mellyによる伝達とさまざまな注意喚起を63回行った</p> <p>学修体制、心構えについてPPTを用いた指導、学生証の配付、クラス委員の選任、たには委員の選任（5名程度）、コピーカード（学修支援センター用）の配付（4月4日） 倫理講習会（4月6日）時の学生の出欠確認、基礎学力テスト（4月5日）時の監督、防災・安全講習会（4月6日）時の参加・学生の出欠確認をした。</p> <p>5月15日に学生64名、教員4名が参加しクラス懇談会を実施した。ビンゴ大会およびお弁当による昼食会を行った。その際、本学での学生生活を振り返る機会となるアルバムや動画作成に向けて、行事の際の写真の撮影を行った。</p>	<p>97%</p> <p>100%</p> <p>90%</p>	<p>面接、mellyは試験に対して真剣に取り組むモチベーションに貢献したり、個人的問題に悩む学生の把握、支援に役立った。</p> <p>オリエンテーションが円滑に支援できた</p> <p>学生は楽しそうに交流を深めており、委員長からは学生の意見が尊重された内容であり、全員が楽しめる会であった、との感想があった。</p>	<p>初回面談の再三の呼び出しにも応じなかった学生2名いた。しかし、12月の緊急面談には全員が応じた。個人的な悩みを吐露する学生も複数名おり、「話を聞いてもらえて楽になった」という学生もいた。</p> <p>問題がなかった</p> <p>学生69名中、64名の参加があり、体調不良の学生を除いて多くの参加があった。</p>	<p>今後もmellyや面談により支援の継続をしていく</p> <p>在校生オリエンテーションに向けた準備を行う</p> <p>5月に実施したため、準備期間が短かった。次年度は開催時期を考えるともっと内容を練ったものにできると考える。</p>

<p>2. 1年アドバイザー担当の授業</p> <p>1)入学前教育開催時支援 2) 京都の文化と健康 (田中) 3) 基礎ゼミ企画調整 (梶川) 4)アーリーエクスポージャー支援 (梶川、田中、村上、大永)</p> <p>5)解剖学実習支援</p> <p>6) 国試関連 (村上)</p>	<p>1)詳細は、入学前委員会資料参照 2) 8回の授業計画を立案し、学外教員の日程調整は教務に依頼、2回分はアドバイザーが講義した。 3-1) ・医療に携わる職業に就く看護学生として、テーマに関する様々な情報を収集し、看護の視点から発表内容を検討し資料を作成することが出来るように援助する。 3-2) ・「看護における○○○について」をテーマとして、「深く関心を持つ」「具体的に調べる」「考えながら読む」「丁寧に書く」「しっかり理解する」「わかりやすく伝える」能力を鍛え、大学で主体的に学ぶことが出来るように適宜アドバイスをを行う。 3-3) ・看護や人間について自己の考えを他者と共有することができる。 4-1) ・6月9日(金) 明治国際医療大学附属病院において、キャリア支援委員会を兼ねる1年生</p> <p>1月30日(火) 京都府立医科大学にて解剖見学、標本見学、骨学実習を実施し、榎原先生、戸田先生、村上が引率した。</p> <p>後期に東京アカデミーの「人体の構造と機能」のみの低学年全国模試を受験し、学生自身で現在の自己の実力を確認し、理解の不足している内容を見直して、知識をつける。</p>	<p>2) 100%</p> <p>3-1) 100%</p> <p>3-2) 73%</p> <p>3-3) 60%</p> <p>4-1) 90%</p> <p>82%</p> <p>94%</p>	<p>2) 大学生としての受講態度も指導しながら支援した</p> <p>3-1)全8グループは提示された期日までに資料の作成を完了し、発表を行うことが出来た。</p> <p>3-2)与えられたテーマに基づいて主体的に行う学生と、受動的な姿勢で取り組む学生とが居た。</p> <p>3-3)グループワークにおいて、自己の考えをチームメンバーと共有しない学生や、チームの一員として活動しない学生が若干名いた。 4-1)57名/68名参加</p> <p>2週間前より健康チェック表およびクラブ活動やアルバイトの実施の可否についての説明を、口頭とMellyを通じて実施した。学生全員が抗原検査を実施できた。</p> <p>68名中、辞退者を除く61名の参加希望あり。当日欠席5名にて、56名の出席</p> <p>1/25東京アカデミー模試を計画したが雪の影響で休講となり、自宅受験とした。68名中64名の申込あり。現在、模試の結果待ちである。セミナーを計画するも学生の自己負担額が高額となり、模試後に各自での見直しに変更した。</p>	<p>2) 学生全員が単位取得できた</p> <p>3-1)担当教員が、学生の学習状況を見ながら、適宜指導や助言を行う必要があったが、提示された期日までに資料を作成することが出来た。 3-2)左記の講義の到達目標も含め、学修に対する姿勢において指導を有する学生が10名/68名いた。 3-3)単位認定のために必要な出席日数が不足して、最終的に科目の単位不可となる学生が1</p> <p>記載漏れ等、正しく健康チェック表を活用出来ていない学生が2割程度いた。</p> <p>実習後のアンケートによると「教科書で学ぶより、実際に生で臓器を見たり触ったりすることで臓器のつくりや仕組みについて理解が深まった。」の意見が多かった。 ほとんどの学生が模試を申し込みしており、当大学の1年生の学力状況の参考となるが、結果は3月初旬となる。</p>	<p>2) 次年度アドバイザーに申し送る</p> <p>3-1)Mellyや各回の進捗状況を確認することや、学生からの報告を受ける中で、教員が適宜必要と思われる指導や助言を行えるように備えておくことが望ましい。</p> <p>3-2)グループメンバー間における役割分担や課題に取り組み参加状況を個別に評価できるように対策を行う。</p> <p>3-3)欠席が続く学生に対する指導やMellyを通じた連絡はなされていた。必要時には学生本人だけでなく、家族からの声掛けやサポートも依頼することを検討する。</p> <p>2週間前健康チェック表の意義と必要性を学生が認識してもらえるように、実例を踏まえる等の指導や伝え方の工夫が必要である。</p> <p>解剖見学実習は授業単位には含まれないが、本大学内では経験できない内容が多いことから、人体の理解や学習意識の向上につながることから、継続実施が望まれる。</p> <p>大学にて一斉に模試の受験日程を確保困難な時期にて自宅受験としたため、結果の成績は参考データとする。</p>
---	--	---	--	--	---

PDCA表

令和5年度	基礎教養講座 (人文科学・外国語ユニット)		PLAN (計画) の内容：学習意欲の喚起 単位修得率90%以上を目指す。		
PLAN (計画)	DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)
P：目標を実現するための具体的な方法を考える	D:計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率 (%)	C:目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A:課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
<p>1. 目標の設定：教育目標を明確に設定する(シラバスに明記)。一般目標として、例えば学生の言語能力の向上や学習スキルの向上など。</p> <p>2. 問題のある学生への対応：学生の学習への問題点を特定し、改善策を臨機応変に考え実行する。例えば、学生が苦手とする文法や語彙の不足、学習スキルの未構築などを想定し、その対応にあたる。</p> <p>3. アクションプラン：具体的なアクションプランとして、例えば、教授法の改善や補助教材の導入、教材の改善などを検討する。</p>	<p>左記の「1. 目標の設定」、「2. 問題ある学生への対応」、「3. アクションプラン」の3つに基づき、授業実践を行う。例えば、新しい教授法を実施したり補助教材の提供などを試みる。</p>	<p>100%</p>	<p>1. ・分かりやすい文章を心がけて資料を作成した。 ・単位取得率は概ね単位取得を希望する学生ほぼ全員であった。位取得を希望する学生は本試験で60点未満であった場合、再試験を受け、再試験に全員合格した。学習に興味を持てるように、またより分かりやすい講義資料の作成を常に心がけ、講義内容の改良が必要な箇所を改良する作業を続けていく。</p> <p>2. 問題のある学生対応については、Google Classroomや学内SNS(メリー)や授業後のフォローを行った。その結果、概ね学生対応は十分であったと考える。</p> <p>3. 教授法の改善や補助教材の導入、教材の改善などについては、十分とは言えない。</p>	<p>1. 授業評価アンケート、成績評価</p> <p>2. 授業評価アンケート</p> <p>3. Google Classroomのコンテンツ</p>	<p>次年度も引き続き、左記のPLANで示す、「1. 目標の設定」「2. 問題ある学生への対応」「3. アクションプラン」の3つに基づき、より充実した授業実践の改善を行っていく。</p>

PDCA表

令和5年度	基礎教養講座 (自然科学ユニット)		PLAN (計画) の内容： 科学的根拠に基づく説明により理解度を深める。 単位修得率を90%以上とする。		
PLAN (計画)	DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)
P: 目標を実現するための具体的な方法を考える	D: 計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率 (%)	C: 目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由/課題/根拠データ等	A: 課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
<ul style="list-style-type: none"> ・自然現象を科学的根拠に基づき理解してもらうため、平易な文章で説明する。 ・理解の助けとなるような講義資料作成。 ・単位取得率を受講学生数の90%以上とする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・シラバスに沿って授業を実施。 ・確認問題の作成。 ・mellyを用いた質問の対応。 ・選択形式の試験にて各科目の理解度を評価。 	100%	<ul style="list-style-type: none"> ・分かりやすい文章を心がけて資料を作成した。 ・単位取得率は概ね単位取得を希望する学生ほぼ全員であった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・単位取得を希望する学生は本試験で60点未満であった場合、再試験を受け、再試験に全員合格した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習に興味を持てるように、またより分かりやすい講義資料の作成を常に心がけ、講義内容の改良が必要な箇所を改良する作業を続けていく。

令和5年度	基礎教養講座 (健康スポーツ学ユニット)		PLAN (計画) の内容：目標； ○全体：単位修得率90%以上。必要な課題は自ら発見できる。 ○実習(実技)科目：生涯を通じてスポーツを楽しむことができる。また、コーチングができる。 ○講義・演習科目：スポーツ・運動について、医科学的基礎知識に基づいた説明ができる。		
PLAN (計画)	DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)
P: 目標を実現するための具体的な方法を考える	D: 計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率 (%)	C: 目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由/課題/根拠データ等	A: 課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な方法については、科目ごとにシラバスに明記する。 ・対象者の技能に併せて、「できない」ことが「できる」ように、マイルストーンを道筋を立てて設定する。 ・対象者の能力に合わせて、「わからない」ことが「わかる」ように、繰り返し説明する。 ・各自の課題や新たな気づきを発見できるように、毎回ふり返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育効果は、各科目「ルーブリック評価表」にて測定する。 	100%	<ul style="list-style-type: none"> ・実技、演習、講義すべて、「できない」ことは「できる」ように、「わからない」ことは「わかる」ように、きめ細かな授業に心がけた。 ・その結果、ほぼ目標は達成できたと考えている。 ・しかし、教え方や教材の使い方には改善の余地が残る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・さらにわかりやすい教材コンテンツ(実技、演習、講義)の作成 ・ClassRoomを利用したコンテンツの活用法 	<ul style="list-style-type: none"> ・来年度も、引き続き、PDCAに基づき、授業実践内容をブラッシュアップしていく。

PDCA表

令和5年度	基礎教養講座 (データサイエンス学ユニット)		PLAN (計画) の内容 :		
PLAN (計画)	DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)
P: 目標を実現するための具体的な方法を考える	D: 計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率 (%)	C: 目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由/課題/根拠データ等	A: 課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
<p>PCの学内LANへの接続確認とoffice365アプリケーションのインストールとアクティベーション、google worksの利用法を学習する。Excelについてはショートカットを利用してExcelデータを処理し、大きなデータ表からそのデータの特性を示す情報を取り出しグラフ化することを目指す。医療で利用される情報の種類や質・情報の創出について考え、データの尺度と2群の検定を選択できることを目標とする。</p>	<p>Word・PowerPointについてはテクニカルポイントを示し、各自調べて完成させる。特にプレゼンテーション動画を作成させる。Excelはステップバイステップで説明し、繰り返し練習を行うことで習得する。講義はGoogle Blogを利用したホームページにすべての解説を作成、繰り返し学習を可能にしている。必要な情報は各自検索してメモやexcelにまとめるように促す。</p>	100%	<p>選択したテーマの解説動画を作成を行い、その内容・まとめり・質などを学生の公開したループリックに従って評価する。Excelを使って与えられたデータの特徴グラフを作成、excelのセル内の計算をテストで評価する。一定の時間内にどれだけ多くの課題をこなせるかを、提出された操作したexcelシートで評価する。一部学生の独習PC環境構築が遅れる学生がいる。</p>	<p>独習環境がHPなどで充実していて、内容も更新されている。PC入手が遅れ、独習のための環境構築できず、学外での独習環境がないなど。PCが他の講義で利用されないため環境構築の必要を感じないことも一要因である。</p>	<p>解説ホームページに不足している情報を追加し、独習環境を充実させる。必修科目は、講義中に確認テストを行い、学習意欲・機会を増やし技術の習得を達成させる。入試課よりPC購入について説明をしてもらい、オンデマンドやHPを利用して、早期のPC環境構築とその確認が必要。さらに他の授業でもPC利用促進が必要。</p>

PDCA表

令和5年度	基礎医学講座 (解剖学ユニット)		PLAN (計画) の内容：解剖学 (人体の構造) の理解度を深める 到達目標：単位修得者を90%以上とする		
PLAN (計画)	DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)
P: 目標を実現するための具体的な方法を考える	D: 計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率 (%)	C: 目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由/課題/根拠データ等	A: 課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
<ul style="list-style-type: none"> 解剖学用語の理解 人体の構造に興味を持つ 教科書の活用 医学の基盤である解剖学の重要性を理解 classroomの活用 (授業のビデオを2週間アップする) Mellyを用いた質問の対応 	<ul style="list-style-type: none"> 解剖学用語の命名の理由と漢字の意味の説明。図形による解剖学用語の説明。運動器 (骨学、筋学) については模型に触れて、スケッチしながら名称を覚える。 ヒトの形態の比較解剖学的な特徴と、比較人類学的な相違について説明する。 日常的な動作を人体の形態的特徴で説明。 ヒトの構造と機能の障害が疾患に至る病理学的な機序を、臨床症例を交えて解剖学的に説明して、基礎医学が臨床的に重要である事を理解 復習方法として、授業をビデオ撮影して、classroomに2週間アップする。試験前には、全ての授業を閲覧できるようにする。 	100%	<ul style="list-style-type: none"> ヒトの形態の比較解剖学的な特徴や比較人類学的な相違について、講義の内容と関連付けて解説することは、学生が興味を持ち有意義であった。 講義内容に関連する日常的なヒトの動作と、人体の形態的特徴の説明に、学生達は興味を示す。 ヒトの構造と機能の障害が疾患に至る病理学的な機序を、臨床症例を交えて解剖学的に説明して、基礎医学が臨床的に重要である事を理解し、質問も多数してくれた。 復習方法として、授業をビデオ撮影して、classroomに2週間アップした事は、学生から高評価を得た。 	<ul style="list-style-type: none"> 講義内容に関連する日常的なヒトの動作と、人体の形態的特徴についての質問が多数来て、学生達が興味を示すのが分かった。 基礎医学が臨床的に重要である事を、臨床症例を交えて解剖学的に説明した事に関して、試験での正答率が高かった。 	<ul style="list-style-type: none"> 講義資料は、講義内容に関連する日常的なヒトの動作と、人体の形態的特徴の説明の資料をClassroomにアップする。また臨床症例を解剖学的に説明する資料と、解剖の動画を掲載する。 各講義ごとの確認テストもClassroomにアップして、紙ベースで資料と確認テストが欲しい学生に関しては、各自印刷するように指示する。 授業の録画に関しては、2週間の限定期間を撤廃して、前期、後期が終了するまで掲載する。 オンデマンド授業を1回導入して、動画資料の解説を行う。

PDCA表

令和5年度	基礎医学講座 (生理学ユニット)		PLAN (計画) の内容 :		
PLAN (計画)	DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)
P: 目標を実現するための具体的な方法を考える	D: 計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率 (%)	C: 目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由/課題/根拠データ等	A: 課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
<ul style="list-style-type: none"> 各学科での国家試験出題基準に沿った教科書を選定。 各教科書に沿った内容を理解させるために、各分野ごとに内容を細分化。 各分野に細分化した内容で講義資料を作成。 復習を確実にするために、分野ごとに確認小テストの実施と解説の実施。 上記の計画にて、単位修得率の目標値を各学科受講学生数の90%以上とする。 	<ul style="list-style-type: none"> シラバスに沿って各分野ごとに授業を実施。 分野ごとに4択形式の確認小テストにて理解度を評価し、フィードバックとして理解度を深めさせるために問題ごとの解説を実施。 対面形式の確認小テストの解説後に、オンデマンド形式での解説動画視聴の学習を追加。 昨年度の確認小テストと期末試験のデータから正答率の低い内容について、より理解を深めさせるために講義資料を改善。 4択形式の期末試験にて科目全体の理解度を評価。 	100%	<ul style="list-style-type: none"> 各分野ごとに内容を細分化してシラバスに記載し、それに沿った授業を実施。 学科によって異なるが、確認小テストの解説を、対面の形式と動画を視聴するオンデマンド形式のどちらかで実施。 対面形式の確認小テストを行っている学科では、再試験用の補講として、動画を用いたオンデマンド形式での解説を実施。 単位修得率は、柔整学科では99%、鍼灸学科では95%、救急救命学科では78%。 オンデマンド授業、講義資料の配布、Googleフォームの使用時にGoogle Classroomを活用。 	<ul style="list-style-type: none"> 正答率の低い内容を学生の理解度が低い、もしくは苦手な内容として把握。 単位修得率が低い学科で、その引き上げが課題。 	<ul style="list-style-type: none"> 正答率が低い内容について、より理解を深めさせるために講義資料を改善。 特に単位修得率が低い学科では、講義資料の改善と確認小テストを使った学習方法について周知徹底。

PDCA表

令和5年度	基礎医学講座 (病理学ユニット)		PLAN (計画) の内容：病気の成り立ちの理解 到達目標：単位修得者を90%以上とする。		
PLAN (計画)	DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)
P: 目標を実現するための具体的な方法を考える	D: 計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率 (%)	C: 目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由/課題/根拠データ等	A: 課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。
<ul style="list-style-type: none"> 各学科での国家試験出題基準に沿った教科書の選定 出題基準各項目において理解の助けとなる講義資料作成 身体の正常な構造・機能からの逸脱である「疾患」は「他人事」ではなく実は「身近なもの」であると理解させる。 アナロジー、メタファーなどを用いて、医療の初学者でも実感できるような「例え話」を織り込みながら、それを病理学の理論につなげて理解させる。 病理検査や検体採取に使用する器具や臓器などを用いたり、とある症状から端を欲してどのように検査が行われ診断されるかをストーリーに仕立て病理診断や治療までの流れを理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 教科書及び事前配布PPTを参考に講義前に予習課題を作成 講義時間最後に国試過去問を用いた確認問題にて理解度を確認 講義時間初めに前回の確認問題を改変した小テストを行い知識定着 確認問題や小テストを用いた解説ノート作成 解説ノートの作り方を小テストの解説時に行い、改変された問題でも解答できるような方法を指導 リアクションペーパーにて疑問点・改善点を抽出し、メリーで回答する。または次回講義内容に反映する。 試験において病気の成り立ちが理解できたことを確認し、その評価として単位を認定する。 	90%	<ul style="list-style-type: none"> 単位取得者の割合は94%で目標値は達成した。 講義時間初めに前回の確認問題を改変した小テストを行って、問題改変部分等を含めた解説をすることで、試験での問われ方や何を理解しておく必要があるのか等が学生に伝わり、試験対策につながったことで、試験結果が中間よりも期末で伸びた学生が多かった。しかしながら、丁寧やればやるほど学生の評価は高いが授業時間が足らなくなるのが難点。 メリーや講義のはじめに行うリアクションペーパーの返答は質問した本人以外にも疑問点の解消につながり、また、興味を持って講義に取り組めるきっかけとなったようである。 解説ノートの作り方や4択問題を使った勉強方法などは好評だった。 	<ul style="list-style-type: none"> リアクションペーパーでの授業に対する感想などで評価した。 自分で作った解説ノートを持ってきて質問に来る学生が増えている。 ただ答えを覚えるだけでなく「なぜそうなるのか？」という「問題を解く考え方」についての質問などが増えている。 	<ul style="list-style-type: none"> 講義内容の強弱・メリハリをつけないと時間内におさまらない。省けるところを取捨選択する必要がある。 質問に来る学生が自分の解説ノートを手にとってきたり、問題を解く考え方についての質問などが増えてはいるものの、なかなかその考え方とか方法が皆には浸透しない。その子にあった方法を見つける手助けをするなどの改善が必要。 基礎学力高い学生を置き去りにしないためにはどうしたらいいか。基礎学力が低いと感じられる学生にどう対応するのがいいのか、誰も取り残さないためにはどうするのがいいのかを考えることが重要。

PDCA表

令和5年度	基礎医学講座 (免疫微生物学ユニット)		PLAN (計画) の内容：ヒトの健康に影響する要因や衛生・公衆衛生の理解を深める。 単位修得率を90%以上とする。			
PLAN (計画)	DO (実行)		CHECK (評価)		ACTION (次への改善)	
P: 目標を実現するための具体的な方法を考える	D: 計画を実行しその効果を測定する。	計画実施率 (%)	C: 目標とその実践の差異、実践した行動の評価・分析を行う。	評価の理由／課題／根拠データ等	A: 課題や問題点についての改善、対策を行い、次へのPLANへ繋げる。	
<ul style="list-style-type: none"> 健康に影響する要因を項目ごとに解説し理解させる。 衛生・公衆衛生について保健活動を分野ごとに解説し理解させる。 授業ごとの振り返りの習慣をつけさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 各項目・分野について、用語の説明や具体例を挙げながら解説する。 各講義ごとにまとめる項目を示し要点をまとめさせる。 確認問題に回答させ、正誤をフィードバックする。 	95%	<ul style="list-style-type: none"> 各項目・分野ごとの具体的な解説はおおむね実施できた。 Google Formの設定を変更し、確認問題の回答回数制限を外すことにより、試験前にも繰り返し利用させることができた。 小テストを実施することにより、講義の最重要点(国家試験頻出項目)を強調できた。 	<ul style="list-style-type: none"> 定期試験の合格率(単位取得率)は95%程度であった。 試験前の自主学習(確認問題利用)が促進された。 	<ul style="list-style-type: none"> 毎回の小テストの正解率を上げるために講義都度の振り返り学習を促すことが必要。 各講義終了ごとの確認問題の利用を促進する。指定期限内解答の得点化などを試みる。 	